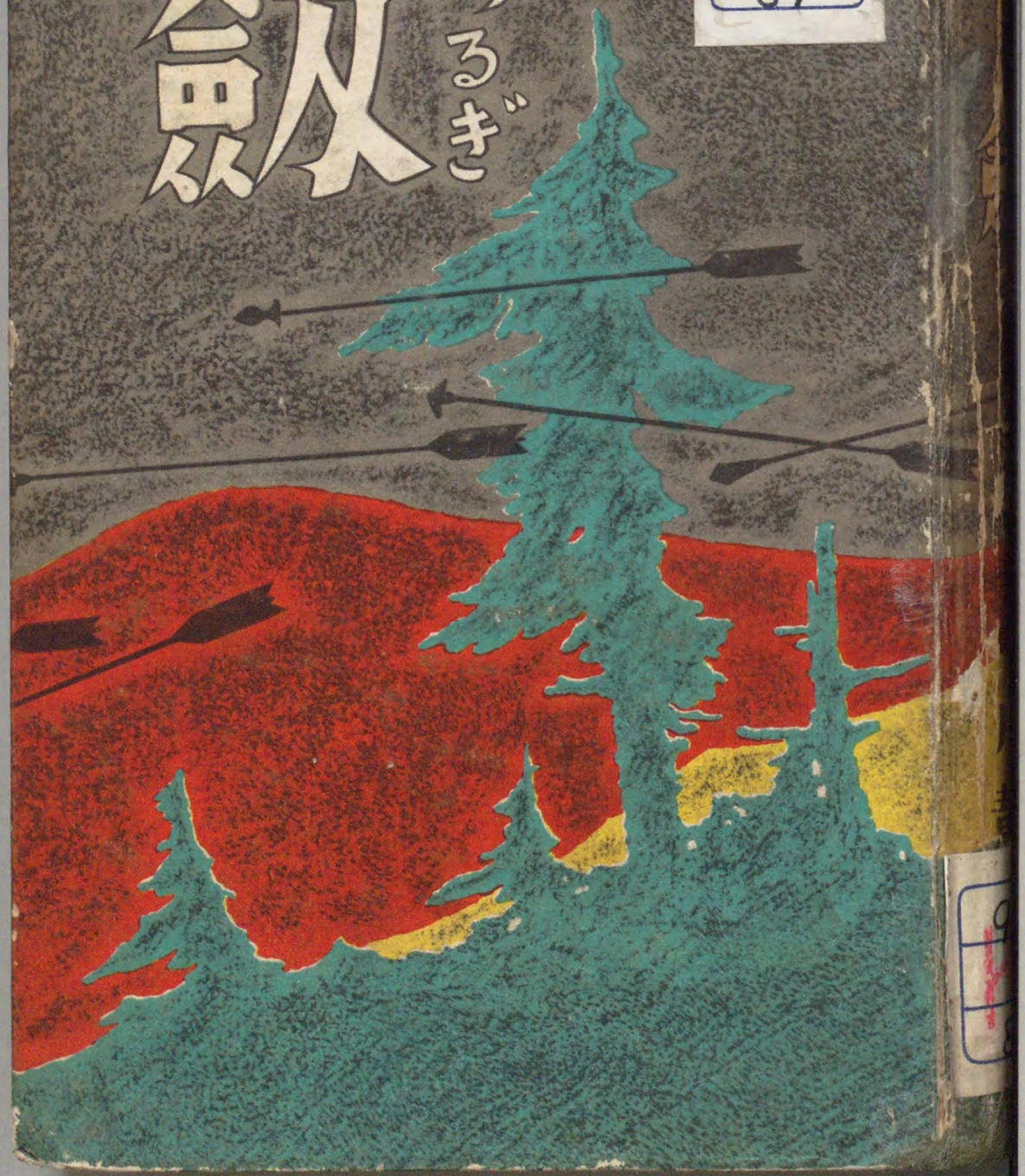
劔 つるぎ



952
K
89

日の國物語

劔（つるぎ）

中川靜村著
岡村不二男繪

日の國物語「劒」目次

昭和十八・三・二

952
89

絶壁（天磐盾）……二頁
劍（師霊）……二三頁
光と影（兄猾）……五九頁
道（椎根津彦）……七一頁
霧（天香山）……九三頁
祭（顯齊）……一二三頁
卑怯（弟磯城）……一三七頁
鵄（長髄彦）……一五九頁
土（土蜘蛛）……一七七頁
陽（大久米命）……二〇三頁
紀……二一九頁
後記……二四五頁

日の國物語「劒」（つるぎ）

口繪
裝幀　岡村夫二男

東京帝國大學圖書館藏

絶壁

それは、三匹のアカテガニだつたのです。あわてて、陽に紅色のはさみをふりたてながら、川岸の葦のしげみに、にげこみました。

「あ、びつくりした。きれいな赤い石だと思つてな、もうすこしで、あやふく、ふみつぶすところだつた。」

大久米命さまは、ならんでお歩きになつてゐる椎根津彦さまに、あかるくお笑ひかけになりました。

「ほう、カニでしたか。私も、てつきり小石だと思つてゐた。」

椎根津彦さまも、あかるくお笑ひになりました。

狭野から、神邑への、山坂をふみこえて、やつと今、熊野川ぞひの

道にお出ましになつたところです。

葦の間から、光を一ぱいたゝへた水の流れが、ちか〳〵とまぶしく見えてゐました。

川とんぼがとび、ひろ〳〵と青い空に、白雲が二つ、動かずにうかんでゐました。

七月のはじめの、やけつくやうな、ひるさがりです。

「彦、波の音が聞えないか？　ほら――。」

「波の音？」

椎根津彦さまは、たちどまつて、耳をおすましになりました。

ざっざっざっと砂の上を、きそく正しく歩調を合せて進んでくる皇軍の皮靴の音の、そのほんのすきま〳〵に、遠くくだける波の音が聞え

てゐます。
「聞えます。たしかに、海が近くなつたやうです。さういへば、ふく風にも潮のかをりがしてゐます。」
「しばらく海を見なかつたな。明るい紀の國の海に、又思ふぞんぶんからだを泳がせてみよう。」
「さうです。あれは六月の二十三日でした。」
「名草戸畔のことか。はげしい戰をしたな。あそこの長は女だつたが戰のかけひきがとても上手だつた。矢もするどかつた。四月の、孔舍衞坂で、長髓彦とも火をはくやうな苦戰をしたが、それにおとらぬ一族だつた。」
「長が女なので、猪のやうな向かふ見ずをしないかはりに、まるで狐

のやうに、ずるくて、しつこいところがありました。」
「狐……あはは。うん、まつたくそのとほりだ。今頃は日のみ子さまのありがたさがやつとわかつて、穴の中で、ふしをがんでゐることだらう。それにしても長髓彦はにくい。見ろ、私たちが、心からおしたひまうしあげてゐた五瀨命さまが、とう〳〵おかくれあそばしたではないか。」
「そのことは、もう、まうさぬことにきめてをります。なみだがこみあげてまゐります。皇軍の人々も、その思ひ出に、うちしめつてをります。」
椎根津彦さまは、にはかに聲をくもらせて、そつと、うしろにつづく皇軍をごらんになりました。お目の中に、もう、一ぱいのなみだが

あふれてゐました。

「いや悪かつた。いふまい、いふまいと思つてゐても、すぐ口に出てくるのだ。心の中にしまひこめないほどの悲しみだからだ。ゆるしてくれ、すまなかつたな。」

「なにを仰せになります。心にしまひこめないのは、みんな同じことです。だが、私たちの道は遠い。苦しみや悲しみは、まだ〳〵私たちの前途にみちあふれてゐることでございませう。」

「悲しみを心にをさめて、私たちは、日のみ子さまのために、まつしぐらに進めばよいのだ。生命をさへ、日のみ子さまにささげてゐる私達だ。八紘に、光をあまねく、めぐむための前進なのだ。前進に、一人一人の生命といふものはない。前進する力——それが一つの生命な

のだ。そしてその大きな生命は、日のみ子さまとともにあればいい。」

「日のみ子さまとともに……それだけで、私はもう充分でございます。」

「うれしいな。」

「うれしゆうございます。」

「もつたいないなあ。」

「もつたいないなうございます。」

「彦、長髄彦にもやがて、私たちの心がわかるぞ。」

「長髄彦にでございますか。」

「さうとも、日向をでて六年、道々では、みんなさうだつた。日の光は、どんな闇をも、あかるくせずにはおかない。日のめぐみは、どんなに深い霧や雪をも、とかさずにはおかない。日の道は、永遠の道だ。

八紘につづく道だ。」
「命さま！」
「彦、生命をささげようぞ。日のみ子さまのためにな。」
「はい。」
「ただお一人の現神。日のみ子さま。私たちはいい國に生まれたぞ。」
「はい。」
「あかるくなれ、もつと。ほがらかに笑へ、もつと。そして、苦しみを乘りこえるのだ。」
「はい。」
「苦しみがなんだ。苦難がなんだ。彦よ、尊い建設と、尊い國作りのために血をながすことがなんだ。私たちには、あかるい明日があり、

希望が永遠につながつてゐる。」
「はい。」
「行かう、元氣で。ほう、海が見えるぞ、海が。」
大久米命さまは、大きなお聲で、皇軍におしらせになりました。
「海だ。海だ。海だ。」
皇軍からは、つなみのやうに聲がひびいてまゐりました。
「海——海——海——。」
なつかしい海。
思ひ出の海。
生命とともにある海。
「海だ。海だ。海だ。」

皇軍は、にはかに足をはやめました。

あかるい熊野の海です。

陽の下で、それはかぎりない大きな希望を青くとかして、はるぐとつづいてゐました。

海にそつて、しばらくたのしい行軍がつづきました。

アカテガニが、このあたりの路に、おどけて走り、路の右手に、代赭色の岩肌をむき出して、涼しい影を作りながら、山脈がせまつてゐました。

「おや？」

先頭に立つてゐた椎根津彦が、ふつと足をおとめになりました。

熊野の海

「命さま、路がきれてをりますぞ。」

「道がきれてゐる……。どうしたのだ。」

「この道は……。ごらんください。あの絶壁の下で、なくなつてゐるではございませんか。」

「なに、おう、なるほどな。絶壁があるんだな。」

「見あげるやうな絶壁です。」

「絶壁をこえぬと、神邑はぬけ

られないとみえる、なるほどな、見あげるやうな絶壁だ。」
「楯の形をしてゐます。」
「うん。楯の形をしてゐる。足がかりもない。さては、名草戸畔のつぎに、こんどは岩が手向かつてきたな。あはははは……。彦、こまつた敵にぶつつかつた。」
「こまつた敵……。」
「さうだ。人間なら神のめぐみがわかる。教へればめぐみの深さがわかる。わからねば弓があり劍がある。だが、岩は、さうもいくまいぞ。」
「ほんとに、岩には、日のみ子さまの尊いお心も、わかりさうもない。弓も矢もだめらしい。」
「ははははは……。彦、また、苦難だ。」

「大苦難です。こえられさうもありません。高すぎます。」
「それで……。」
「……。」
「ひきかへすか。だまつてゐるところをみると、彦は岩に負けたらしいな。」
「負けません。」
「うん、負けないか。こえるか。」
「はい……、それが……。」
「こまつたらしいな。」
「命さまに、こえられますか。」
「こえる！」

「……。」
「こえるぞ。方法を心配してはこえられない。どうしようか……。こえられるだらうか……。そんな氣持で、大苦難は突破出來ないぞ。」
「でも……。」
「でもではない。信念だ。精神だ。ただ勝つのだ。見てゐろ、私の力を、私はただ力でおしきるのだ。」
「ただ力と仰せになりましても……。」
「心配するな。力がもえあがれば、方法はおのづからそこに生まれる。」
大久米命さまは、くるりと、うしろをお向きになりました。
「とまれ！　絶壁がある」
皇軍は、ぴたりととまりました。

ゆびさされた絶壁を見ました。
大きな、雲にとどく絶壁です。
「おゝ！」
聲が一つになつて、おどろきの叫びをあげると、それきり、しづかになりました。
聲をのんで、目をみはつてゐるのです。
「見ろ！　この絶壁を！　路はここでなくなつてゐる。これをこえねば、皇軍の進む道がない。のこされた、ただ一つの道だ。絶壁だけが、私たちの道だ。」
息をひそめて、人々はつぎの言葉を待ちました。だが、それきり、しばらく命さまは、目をつぶつて、何も仰せになりませんでした。

絶壁だけが、ただ一つの、のこされた私たちの道。
苦難だけが、ただ一つの、のこされた私たちの道。

人々の心の中に、その時、ふつ〳〵と、たぎるやうに力がわいて來ました。

日本人だけが知る、生命の力です。
絶壁がなんだ。
苦難がなんだ。
それがのこされた、私たちのただ一つの道であるなら、生命のかぎりそれに向かへばいい。

日のみ子さまのための、それが、ただ一つの道であるなら。
あゝ、日本人だけが知る、それは神ながらの、強く正しく雄々しい生命の叫びです。

「行け！」
「行け！」
「行け！」

嵐のやうな叫びが、おこりました。
命さまは、につこりお笑ひになりました。

「行くか！」
「おゝ！」

人々は高く兩の手をあげました。

「よし！　絶壁をこえて行かう。日のみ子さまのために。」
「日のみ子さまのために。」
人々は、聲をあはせて叫びました。
命さまは、深くおうなづきあそばすと、又、くるりと背をお向けになりました。
「先頭は私だ。まづ私が生命をなげ出すぞ。」
「私も。」
「私も。」
聲が、背にとびつくやうに聞えました。
「よし！　それでいい。」
命さまは、じつとお目をおつぶりになりました。泣いておいでになるやうでした。

「さあ、私の肩に、彦よ、兩手をのせるのだ。そして、力一ぱいにぎれ。それから、つぎ〳〵に同じことをつたへるのだ。」
「お肩に……。」
「さうだ、おまへの身體を、私の肩になげかけるつもりで。私はおまへの苦しみを、すつかり背負つて行かう。」
「命さま、それはあまりに。」
「ゑんりよするな。そのかはり、そのつぎの苦しみを、すべておまへが背負つてやるのだ。つぎ〳〵、すべての苦しみを、自分が背負ふ覺悟をするのだ。自分だけ樂をしようと思つてはならないぞ。自分は、自分の苦しみだけを背負へばいいと考へてもならない。他人の苦しみ

を、一人で背負ふ――民族の苦しみを一人で――國の苦しみを一人で背負ふ――それが神の心だ。いいか、さあ、肩にすがれ。」

椎根津彦は、ふかくうなづきました。

そして、かたく、命さまのお肩をつかみました。

つぎ〳〵、つぎ〳〵。

男から女、女から子供、強いものから弱いものへ――。

一列です。一列です。

すべての苦しみを背負ふ覺悟で――。

そこには、一人の樂をする者もありませんでした。順序正しく――力一ぱい――今こそ一列は、日のみ子さまをまん中にして、長く、一列の美しさと、強さと、働きのすべてをあらはしたのです。

「行くぞ！」

「おゝ！」

一列は動き出しました。絶壁へ！苦難へ！登ります。登ります。

心を一つにして。

はるかの希望へ。日の道を一すぢに。

【日本書紀】

六月乙未朔丁巳、軍、名草邑に到りて、則ち名草戸畔といふ者を誅ふ。遂に狭野を越えて、熊野神邑に到り、且ち天磐盾に登りて、仍りて軍を引き漸に進む。

劒（つるぎ）

米の種。
綿の種。
粟の種。
黍の種。
麥の種。
豆の種。
それから野菜の種もある。
土は——。
土は水のおかげで、ふわふわとした、まるでふとんのやうだ。種子

にとつて、まことにいい寢床である。
空は——。
あかるくて日の光があふれてゐる。
雨がふる。
霧が流れる。
霜が立つ。
雪がふかい。
一年の、暑さ寒さに、くるひがない。
家の子は、みんなぢやうぶで、元氣で、働き者がそろつてゐる。
手も足も、力がみなぎつてゐる。血の色もいい、はく息もふとい。
山には、山の幸、川には、川の幸がある。

家の子をそだてるのに、何のふそくもない。

「おゝ、よしよし。」

高倉下さまは、十の指ををつても、まだたりないほどの幸福に、眼をほそめながら、熊野のふかい谷間を歩いてゐました。

「だが、できればもつと、田や畑をふやしておかねばならない。家の子は、日ましにふえていくのだ。子が生まれ、孫が生まれ、又その子や孫が生まれる。さうだ、熊野の邑は、百年千年ののち、子や孫でうづまるだらう。みんなすなほで、元氣にみちた子孫が——。そのためには今作つてゐる幾百倍、幾千倍もの米が必要になつてくる。粟もい

る。黍もほしい。麥も豆も野菜も、このままではいけない。ことに、雪のふかい熊野では、着る着物も、ぶあつくせねばならない。かぜをひかせてはならない。一人の病人をつくつてもならない。そこで……。」

高倉下さまは、足をとめて、日あたりのいい、峯を、谷を、平地を、ずつとながめまはしました。

「まだ〳〵きり開けば開くことの出來る土地がのこつてゐる。働けば働くことの出來る土地がのこつてゐる。うれしいことだ。明日からはもつと働くことにしよう。百年ののちへつたへるためには、今の百倍の働きをしておかねばならぬ。千年ののちへのこすためには、今の千

倍の根氣と努力が必要だ。そこで……。」

高倉下さまは、力のもりあがつた兩腕を、ぶるんぶるんとふりました。それから、ゆつくり胸をはつて、息をふかくすひこみました。

「私は、家の子のために、自分をなくしてしまはねばならぬ。自分の夢や、のぞみや、考へを、家の子のために、ささげねばならぬ。人間といふものは……。」

高倉下さまは、又歩きはじめました。

「人間といふものは、一ばん大きいと思ふ目的に生きることが大切なのだ。私だつて、もともと、熊野の邑で百姓にならうなどと思つてもゐなかつた。名草の戸畔や、丹敷の戸畔のやうに、どん〳〵土地をひろめ、名前をあげ、ほかの一族を征服して、高倉下のえらさを、みんなに見せたかつた。弓矢をとつても、私は、決して彼等にまけないだけの、自信はあるんだし、私の血は、彼等にまけないだけの尊さがあるのだ。だが……。」

高倉下さまは、又たちどまつて、大空をながめました。

空には、夏の太陽が、目もくらむやうに、烈々と輝いてゐました。

なんといふ、大きなかがやき。

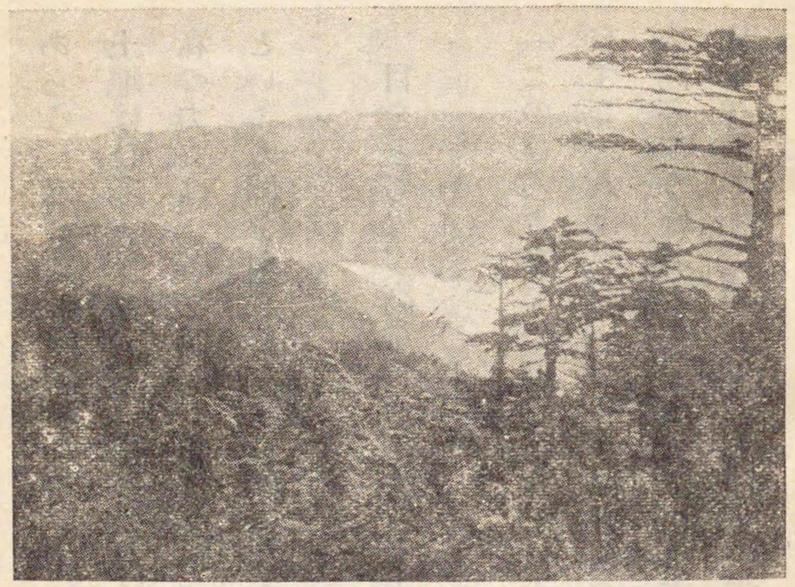
なんといふ、はげしい光。

なんといふ、ふかいひろい心。

それは、ものの生命の底の底まで、やきつくし、あひいだきとらねばやまぬ光です。

「あの陽の光にくらべて、そんなえらさや、強さは、芥子粒よりも小さいものだ。人間が、人間だけの世界で考へてゐる理想などは、あの空の雲のやうにはかない。そこで、一ばん大きい目的といふのは、いつたいなんだらう。」

高倉下さまは、じつと考へました。



熊野の山

「家の子のために、自分をなくすることだ。自分一人の考へをすてて、みんなのために生きることだ。だが、この熊野の山から、見わたしただけでも、土地は、目のとどく限り、ひろ〳〵と、ひろく大きく、ひろがつてゐる。雲につづき、霧にかくれてゐる。山の向かふにも國があらう。雲や霧の向かふにも國が

あらう。私の考へてゐるひろさとは、くらべものにならないひろさで土地はひろ〳〵と、つづいてゐるはずだ。そのひろさをいだくことは、私の力では、どうしても出來ない。そのひろさに、生きてゐる何十萬といふ人間をめぐむためには、私の力は、あまりにちひさすぎる。

目をとぢて、高倉下さまは考へました。

「このひろさを、この大きさをめぐむことの出來る立派な神が、かならずお一人は、おいであそばすはずだ。さうだ、かならず。それは、太陽のやうなお方にちがひない。太陽のみ子、日のみ子、あゝさうだ日のみ子さまがおいであそばすはずだ。どんなにけだかく、どんなに

立派なお方だらう。私などとはくらべものにならない尊い日のみ子さま、それが、どこかにおいであそばして、ぢり〳〵と太陽のやうに、あらゆる家の子を生かしてくださつてゐるのだ。」

高倉下さまは、今やつと、一つの考へ方に到達しました。何十年もの間、考へに考へてゐたことが、太陽を仰いではじめてわかつたのです。

日のみ子さま。

日のみ子さま。

日のみ子さまに、心からおつかへまうすことが、高倉下さまにとつて、一ばん立派な生き方だといふことがわかつたのです。

「わかつた。わかつた。私は、日のみ子さまといふことを考へないでものごとを考へてゐたのだつた。それで、どんな考へも、ちぐはぐになつてゐたのだ。よし！　私は、まだ、この眼でをがんだことのない日のみ子さまを、心の神さまとして、日も夜もおつかへまうさう。どんなに苦しい働きも、どんなにはげしい仕事も、おつかへと思へば、うれしくなるはずだ。そして、力の限り精出して、私がおあづかりまうしてゐる、家の子のために、自分をささげよう。谷をひらくこと、木をきること、その仕事の中に、私は、おつかへのよろこびを感じていかねばならない。そして、日のみ子さまにおあひ出來る日を待つことにしよう。おあひ出來る。きつとをがむことが出來る。私がいつしよけんめいであればあるほど、その日が近くなるのだ。さあ、歸つて、

家の子をよびあつめ、このよろこびをつたへるのだ。百姓といふ仕事が、どんなに立派なものか、劍をもたなくとも、どんなにふかいよろこびの生活が出來るものかを、知らせてやらねばならない。」

高倉下さまは、この頃の、家の子の、なんとなしに、不滿な顏色、不滿な仕事ぶりをよく知つてゐました。

そして、それが、劍をすてたためであることもよく知つてゐました。

戰をこのみ、自分の土地をひろめるためには、敵をあやめ、その血も肉もくつてしまつたほどの荒々しい人間を、正しい、まじめな、平和な生活に進まさうと考へた、高倉下さまの努力が、家の子にとつて決して愉快なよろこびにみちた生活でなかつたことを、高倉下さまは

よく知つてゐたのです。

だが、高倉下さまは、自分のためにのみ生きる生活、自分の慾や名のために生きるくらしが、決して、子孫百年千年のための正しい生き方でないことを、はつきり心にもつてゐたのです。

だが、高倉下さまの心の中には、まだ、自分が家の子の長として、熊野の邑の長として、生きようとする氣持がのこつてゐました。

いはば、自分が一ばんえらいのだから、自分の下にゐる者たちを愛さねばならぬといふ、『自分』の氣持が、ないでもなかつたのです。

それが今、朝霧の晴れるやうに、大きな考へ方にかはりました。

それは——。

自分といふものはない。

あるのは、ただ、日のみ子さまお一人だ。

自分も、その光の中につつまれてゐるのだ。

家の子とともに、生かされてゐるのだ。

どんな生活の中にあつても、ともに、それは、日のみ子さまへの『おつかへ』なのだ。

劍をとることも、

百姓であることも、

いつしよけんめいであれば、『おつかへ』の心においてちがひがない。

姿のことではなく、精神のことだ。

日の光は、千年萬年であり、その光に生かされてゐるものは、又千年萬年の生命がある。

自分の力で、千年萬年生きようとするのではない。
日の光が、生かしてくれるのだ。
不安の生活ではなく、よろこびの生活だ。
爭ひの生活ではなく、平和の生活だ。
高倉下さまは、いつさんに山をかけおりました。

そのあくる日から——。
熊野の邑は、笑ひでつつまれました。
よろこびで一ぱいになりました。
日の光の下で、人々は、めい〳〵の仕事にいつしよけんめいとなりました。高倉下さまは、神さまと一つになつたよろこびの中で、まい夜、

尊い神さまのお姿を夢に見、神さまのお聲を聞くことが出來ました。

ある夜、高倉下さまは、夢を見ました。
夢であつたか、あるひは目がさめてゐたのか、あとになつても、高倉下さまが、わからなかつたほど、はつきりした夢でした。

一ぱいの光でした。
雲が七色にかがやいてゐました。
その光と雲の中に、その光よりも、もつとうるはしい神さまが、おたちあそばしておいでになりました。お二人です。お一人は女の神さまで、お一人は男の神さまでした。

女の神さまは、ことに、おんうるはしく、かがやきにみちておいてあそばしました。

男の神さまは、ひろいお肩と、ひろいお胸と、見るからに強さにみちた、お手とお足をお持ちでした。

「武甕雷神よ。」

玉のやうに、すみきつたお聲が、女の神さまの、お唇をもれました。男の神さまは、ていねいにお頭をおさげなさいました

女の神さまが、どんなに尊いかは、そのかがやきをはいしただけでも、よくわかりました。

女の神さまは、天照大神さまであらせられたのです。

「武甕雷神よ。あの葦原の中つ國では、今、悪神共が、たいそう荒々

しくさわいでゐる。わがみ子たちは、そのために、非常に苦しんでゐるらしい。葦原の中つ國は、おまへが、まへにも平定したところだ。大國主命とのあひだに、うまく國ゆづりの話あひをつけたところだ。さらに、もう一度、天降つてはくれまいか。」

武甕雷神は、うやうやしく仰せになりました。

「しようちいたしました。でも、私がわざ〳〵まゐりませんでも、天照大神さまが、まへに私が天降ります時おさづけ下さいました、み劒を、日のみ子さまにお下しになれば、その御威力によつて、悪神どもは、おのづと平ぐでございませう。」

と、お答へあそばしました。

天照大神も、

「あゝ、さうであつた。したがはぬものをしたがへるには、劍さへあればよかつたのだ。では、さうしよう。」

と仰せあそばして、み姿をおかくしあそばしました。

武甕雷神は、しばらく、そのおんあとを、ふしをがんでおいでになりましたが、やがて、お頭をおあげあそばして、正面をお向きなさいました。

その正面はるかにさがつて、不思議にも、高倉下さま自身が手をついてゐたのです。

なぜ、そんな、畏れおほいお場所に自分がゐたのか、又、なぜ、そんな立派な神さまが自分にお聲をおかけあそばしたか、高倉下さまは夢がさめてからも、とけぬ、一つの、なぞとしか考へることが出來ま

せんでした。

おそらくは、自分の、ただ一すぢの祈りと願ひが、神のみ心につうじたのだ——としか考へることが出來ませんでした。

武甕雷神は、おごそかに仰せられました。

「高倉下よ。ここに一ふりのみ劍がある。祓靈とまうすみ劍だ。これをおまへの倉に降すぞ。必ず天つみ子にたてまつるやうに。」

「もつたいなうございます。おそれおほいことでございます。かならずともに……。」

高倉下さまは、自分の聲に夢をよびさまされました。夢でした。だが、夢にしては、あまりにはつきりとした、お姿でありお聲でした。

高倉下さまは、じつと二つの眼を見開いたまま、夢のあとをたどつ

てゐました。

あかるい日ざしが、屋根をもれて、部屋中に、ちか〳〵とかがやいてゐました。

高倉下さまは、はね起きました。

夢ではない。

夢ではない。

高倉下さまは、急いで着物を着ると、山の頂きにたてた、倉の方へ走り出しました。

夢ではない。

夢ではない。

夢であつてなるものか。

多年、おつかへまうしあげ、おをがみまうしあげたいと、その祈りに生きて來た私だ。

日のみ子さま。——夢につかへ、夢にはいした、ただお一人の日のみ子さまに、今こそ　お役立が出來ようといふのだ。

夢ならば、さめるな。

夢ならば、このままであれ。

夢ではない。

夢であつてなるものか。

高倉下さまの胸は、つぶれるやうに、どき〳〵と血が波だちました。

氣がくるつたやうに、倉をめざして、走りました。

倉の戸は、しまつたままでした。

高倉下さまは、ふるへる兩の手で、倉の戸を開きました。

米の種子、粟の種子、麥の種子――が、うづ高くつまれてありました。

永い努力の種子でした。家の子の、千年の生命をつなぐ寶でした。

高倉下さまは、ひざまづいて、ていねいに禮をしました。

それから、うすぐらい倉の中に、じつと目をすゑました。

「おゝ……。」

高倉下さまは、とびあがりました。

「あつた！」

高倉下さまは、ぢりぢりと、にぢりよつて行きました。あつた！

あつた！　あつた！　と、くりかへしながら。身體は、ぶる〳〵とふるへ、聲は、のどにつまりました。なみだがとめどなくあふれました。

あつた！　あつた！　あつた！

倉の底板に、屋根をつきぬけて天降つたみ劍が、ぷつつりささつたまま、かがやいてゐました。

「祥靈――祥靈――祥靈。」

高倉下さまは、その前にひれふして、同じ言葉をくりかへしました。

「今こそ、劍をとつて起つ日が來たのだ。百姓の私に、み劍が天降つた。もつとも正しいみ劍のつかひ方が、今はじめて教へられ、示されたのだ。百姓も起てよ――すべて一つ心に、日のみ子のために起てよとのお教へなのだ。聖い戰に、まことの生き方に、加へられたのだ。

今こそ、今こそ、戰のほんとの意味を敎へられたのだ。」

倉から、み劒をおしいただいて、とび出した高倉下さまは、朝霧のかかつた谷間々々へ、あるかぎりの聲をふりしぼつて叫びました。

「あつまれ！　あつまれ！　一人のこらずあつまれ！　よろこびの日が來た。しあはせの日が來た。ほんとに生きる日が來た。おーい、おーい。

それからそれへ、同じ言葉が、つたへられました。熊野の山は、その『こだま』であふれました。

よろこびの日が來た。

しあはせの日が來た。

ほんとに生きる日が來た。

家の子は、峯から、谷から、木かげからあつまりました。

おーい、おーい、おーい。たがひに、よびかはし、たすけあひながら、倉の前にあつまつて來ました。

「見ろ！　天にましますから、高倉下とその家の子に、この尊いみ劒が下されたのだ。最も正しく、最も平和に、最も努力してゐた百姓が、日ごろ話して聞かせてゐた日のみ子さまの、一ばんの家來となることが出來たのだ。ただ一すぢに、日のみ子さまを信じてゐた私たちが、日のみ子さまの、おん手足となる日が來たのだ。正しく生きることが、最も強い生き方であつたことが、今こそはつきりわかつたであらう。」

「わかりました。」

「姿ではない――心だ。と、いひ聞かせて來た私の言葉が、今こそはつきりわかつたであらう。」

「わかりました。」

「劒をとつて起て。今こそ劒をとつて起つ時だ。劒だけが正しく、劒だけが平和であり、劒だけが努力なのだ。私たちは、神のみさしづのまゝに起つのが、尊い生き方である。鍬をもつ時、劒をもつ時――その時は、神さまのみ心から出る。起て！　起て！　劒をとつて。」

劒だ。

劒だ。

劒だ。

家の子は、どつと聲をあげました。

やがて――。

祟靈を先頭にして、高倉下の一隊は、手に手にするどい劒を朝日にかがやかせながら、木立をぬつて、日のみ子さまのもとに急ぎました。

荒海の大浪に、稻氷命、三毛入野命のお二方を、おうしなひあそばした日のみ子さまは、さきに五瀨命をもおうしなひたまひ、たちきれぬおん兄君たちへの御愛着のなみだに、おぬれあそばしてゐました。

荒坂津に、やうやく、ご上陸あそばされますと、この、つかれにつかれた皇軍にたいして、豪族丹敷戸畔が双向かつて來ました。

ふきすさぶ嵐にもまれ、ふりしぶく大雨にうたれ、さかまく波にいくたびか難船の不安をさへ覺えて、日のみ子さまお一人をお守りする

ために、二方の皇兄が、海におはいりあそばしたほどの難行です。加へて、丹敷戸畔は、山にも海にも、なれた一族、そのご苦戰は、ひとことほりではありませんでした。

勇をこして、奮戰に奮戰をかさね、つひに、かしらの戸畔を誅殺あそばしましたが、その殘黨はなほ、あちらこちらにむらがり、ご進軍をはばんでゐました。

皇軍のつかれは、その極にたつしてゐました。

その上、熊野の山氣は、ひさしく海になれた皇軍に、毒氣となつてせまりました。

深い山又山をくぐつて流れる氣流に、なれぬ皇軍は、呼吸さへ苦しく、つかれも二倍となつて、われ知らず、うとうとと、ふかい眠りに

おちてしまひました。

畏くも、日のみ子さまがたまでが、お眠りあそばすほどのおつかれです。

賊は、この日を待つてゐました。

山氣が、なれぬ人々をふかい眠りにさそふことを知つてゐた殘黨はなりをひそめて、この日を待ち、一擧に攻擊にうつる手はずをきめてゐたのです。

危險は、日、一日とせまつて來ました。

高倉下の一隊が、山をかけおりたのは、この時です。

神靈は、うや〳〵しく日のみ子さまのみ前に獻上されました。高倉下の忠誠は、み劍とともに、日のみ子さまのお目にとまりました。

「よくねむつた。」

日のみ子さまは、お眼ざめあそばしました。
そのみ聲とともに、人々も、がばと一時にはね起きました。
神靈。
神靈。
天つ神の御加護。
日の民は、感激しました。

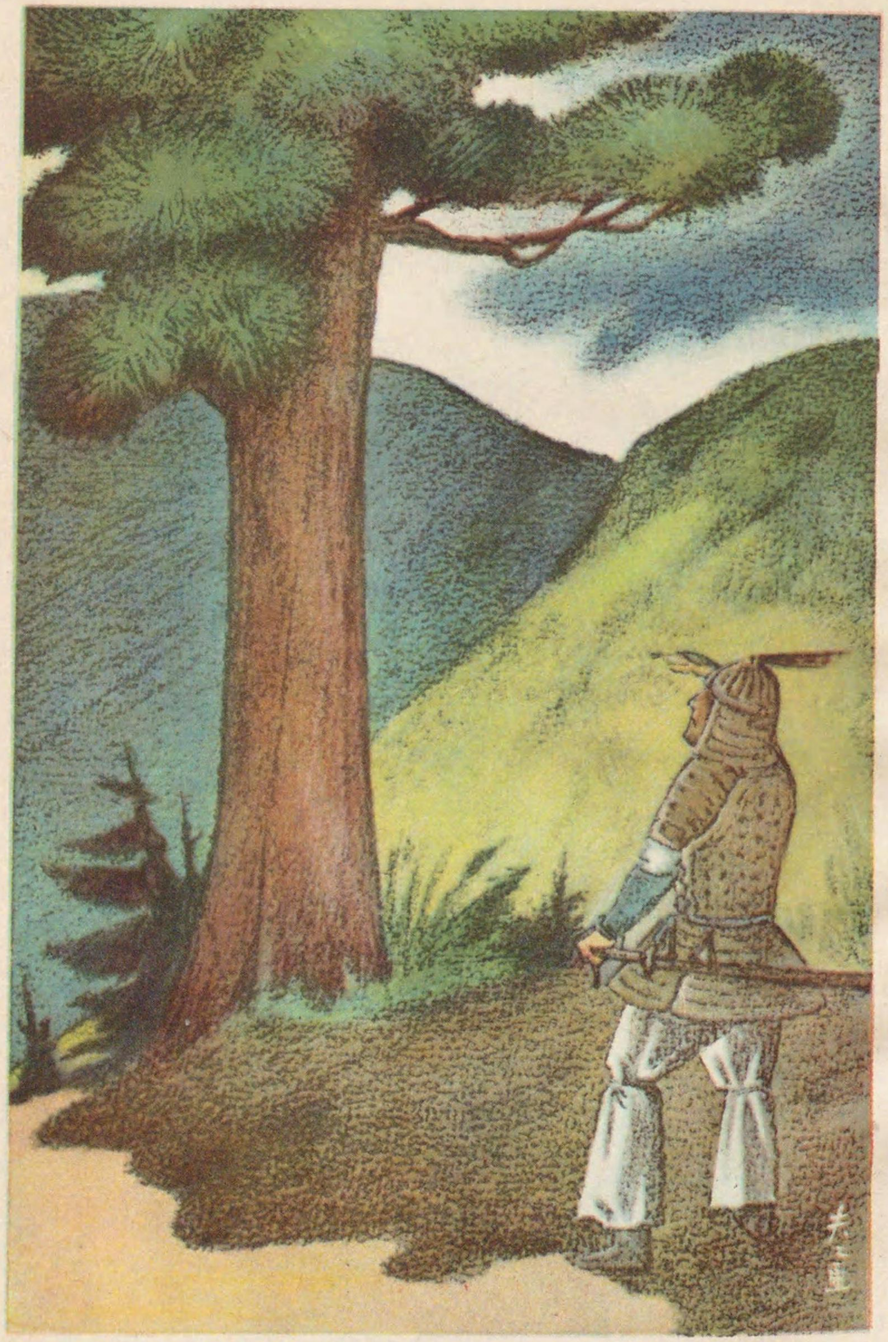
高倉下の一隊は、その日から、皇軍の先頭にたつて、はな〳〵しい戰をはじめました。
劒。劒。劒。
劒が、今、生きる神の子の最も正しい道でありました。

今こそ、力のかぎり、劒をふるふべきときでした。
一つ心になつて、高倉下の一隊は、自らを劒とし、高倉下はその先頭に立つて、日のみ子さまにつかへまつるよろこびになきぬれつつ、日も夜も、ただひたすらに劒をふるひました。

【日本書紀】

天皇、獨皇子手研耳命と軍を帥ゐて進み、熊野荒坂津に至ります。(亦の名は丹敷浦。)因りて丹敷戸畔といふ者を誅ふ。時に神毒氣を吐きて、人物咸に瘁えぬ。是に由りて皇軍復た振ること能はず。時に彼處に人有り、號を熊野高倉下と曰ふ。忽に夜、夢みらく、天照大神武甕雷神に謂りて曰く、夫の葦原中國、猶、聞喧擾之響焉。宜べ汝更た往きて征て。武甕雷神對へて曰く、予行らずと雖も、平國之劒を下さば、則ち國將に自らに平けなむ。天照大神曰く、諾。時に武甕雷神登ち高倉下に謂りて曰く、予が劒の號を韴靈と曰ふ。今當に汝が庫の裏に置くべし。宜べ取りて天孫に獻れ。高倉下唯唯と曰すとみて寤めぬ。明旦、夢の中の教に依りて、庫を開けて視るに、果して落ちたる劒有り。倒に庫の底板に立てり。卽ち取りて以て進る。時に天皇

適寐ませり。忽然にして寤めて曰く、予れ何ぞ若此長眠しつるや。尋いで毒氣に中れる士卒、悉に復た醒め起きぬ。



光(ひかり)と影(かげ)

東と南に開けた下縣の段丘は、ゆるやかな綠の起伏をつづけながら、とほく大臺の山脈につづいてゐます。

目に見えるかぎり、はる〳〵と、したたるやうな綠の起伏です。それは海にもにた、光と影だけの世界でした。

ただ一線、櫻峠をへて吉野につうずる、褐色の道だけが、この景色の血管のやうに、もりあがつて見えました。

カナカナゼミが、ふるやうにないてゐました。

ぱつたり、音のたえた夏の午後を、カナカナゼミだけが、光と影をむすんで、景色をよびさましてゐました。

八咫烏さまは、身がるく、褐色の道を横ぎると、道につづいて、又ゆるやかな段丘となつてゐる南へ、足をはやめました。

八咫烏さまの顏も、手も、足も、およそ陽にあたるところは、すつかり陽にやけて、ながれるやうに汗が出てゐました。

汗をぬぐひもせず、ほとんど、小走るやうにして、八咫烏さまは、段丘をぐん〳〵登つて行きました。

皇軍のご先鋒をつとめて、大臺から菟田までの、けはしい深山をかきわけ、身のたけよりも高い草の中に道をもとめて、谷をわたり、崖を下り、岩肌をよぢて、やうやう、ここまで、たどりついた八咫烏さまは、休むまもなく、その日から、高城を中心として、東へ、西へ、北へと、土地の樣子、賊の配置、攻める道、防ぐ道をしらべてゐたの

です。

八咫烏さまにとつても、皇軍のどの大將にとつても、菟田の地は、はじめてのことであり、一たい、どんな種族がすんでゐるのか、ゐる所はどのへんかさへ、まだ、はつきりわかつてはゐなかつたのです。

兄猾、弟猾の兄弟を中心とする、猾族が、このあたりにすんでゐることを聞いたのは、まだやつと十日になるかならないかでした。ですから、兄猾といふ豪族が、どんな強さをもつてゐるのか、その心の中はどうなのか、少しもわかりません。

「心のすなほな男であつてくれればいいな。日の子みさまの、お惠のふかさを話して、すぐわかつてくれればいいな。日の民として、忠義をちかつてくれる男であつたら、どんなにうれしいか知れないがな。」

八咫烏さまは、毎日、そんなことを心に祈りながら、猾兄弟の家をさがして歩きました。

はじめの段丘を登りつめると、そこに大きな杉の木がありました。いつも、高城から、とほくながめてゐたとき、一つの大きな丘のやうに見えてゐたのが、じつは、この杉の木だつたのです。

大臺のふかい山にすんで、いつも大きな木を見なれてゐた八咫烏さまも、これには、おどろきました。思ふさま、枝を八方にのべひろげた杉は、まつすぐまつすぐ、天に向かつてのびきつてゐました。

そこには、弱さや卑怯が少しもありませんでした。神々しいまでのおちつきと、勇氣がみなぎつてゐました。

日の光を思ふぞんぶんうけ、日に向かつて、ただ一すぢにのびてい

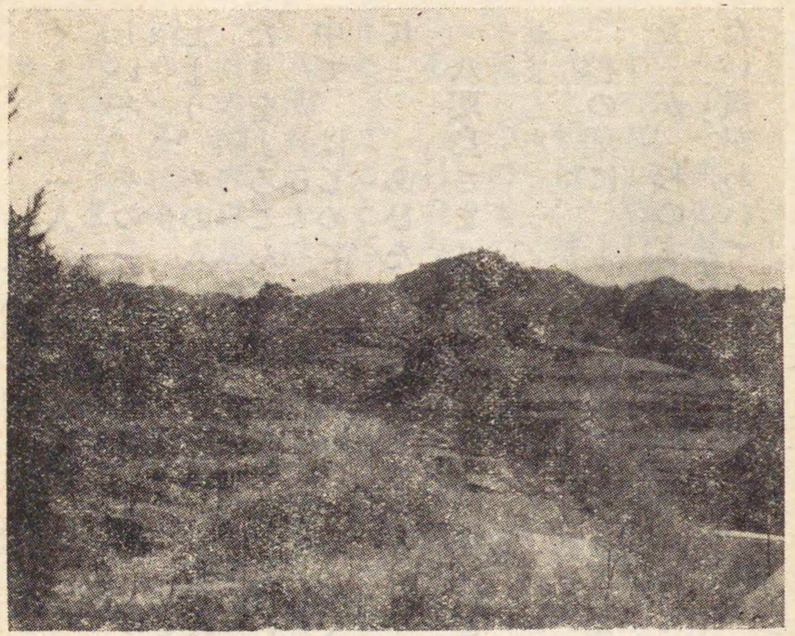
かうとする。その大きな希望が、この木を育ててゐるのです。

八咫烏さまは、しばらく、まばたきもせず、ちか〳〵と、目もくらむほど日にかがやいてゐる梢のあたりをながめてゐました。

山に育つた八咫烏さまは、一本の木を見ただけで、その木の心さへよみとることが出來ました。ふかく木を愛してゐる者には、一つ一つ葉ずゑから、ひそ〳〵ともれてくる、木のささやきが聞えるものです。

「立派な木だ。猾族のすんでゐる菟田の地には、めづらしいほど立派な木だ。これだけの木を育てた一族の中には、きつと、この木におとらぬ、立派な人間がゐたにちがひない。油斷はならない。立派な人間がゐる。ここにも——。」

八咫烏さまは、さう考へました。



地說傳山倉高田菟蹟聖皇天武神

一たい、だれだらう、その立派な人間といふのは。

この人間には、もう、日のみ子さまのお心がわかつてゐるかも知れない。

日の道を心えてゐるかも知れない。

すなほで、勇ましくて、どつしりとしてゐて、あかるい人間。

「はやくあつてみたい。少

くとも、一人だけはゐる。それも、一族の上に立つ人の中にだ。うれしいぞ。その一人にあつて、私は心ゆくまで、日のみ子さまのお話をしよう。その人も、眼に一ぱいなみだをためて、心から、そのありがたさをよろこんでくれるにちがひない。ちやうど、私が、大臺の山の中で、はじめてその話を聞いて、泣くほどうれしかつたのと同じやうに……。あひたいな。はやくあつてみたいな。」

八咫烏さまは、まばたきもせず梢を見あげながら、胸をわく〳〵させました。

杉の葉に、もりきれないほどの日光が、かっと土にこぼれてゐました。が、杉のま下は影を作つて、そこから、たえず、水のやうにつめたい風がわいてゐました。

一歩そとの暑さとくらべて、ここはなんといふすずしさ。

日の光が強ければ強いだけ、影はこく、すずしいものです。

光と影は、まつたく反對のやうでゐて、その心が一つのもの、生命も又一つのものなのです。

あゝ、日のみ子さまの、やけつくやうな、み光をうけてゐる日の國こそ、まことに、その惠を、ふかく心に知ることが出來るのです。

八咫烏さまは、はつきり、そのことを知ることが出來ました。

日の國だけがもつ、光と影のつながり、それを、やさしいすなほな猾の一族にも、よく話してやりたいと思ひました。

八咫烏さまは、第二の段丘を小走るやうにかけ登りました。

光。

光。
光の中を。
影。
影。
影のよろこびをつたへるために。

森が見えました。
川が見えました。
ぎら〳〵とまぶしい光の中に。
川に向かつて、森のかげにたてられた、猾族のすみ家を發見したのは、第三の段丘の上に登りつめた時です。

あゝ、影の中に、まだ、神を知らぬ一族がすんでゐました。
「ゐた！　ゐた！　ゐた！　森のかげに。」
八咫烏さまは、大聲で叫びました。
ま晝でした。
猾の家から、ほそく、あるかないかほどの、煙が、まつすぐ、紫色に立ちのぼつてゐました。
大きく胸をはつて、兩手をさしあげて、八咫烏さまは、一さんに、段丘をかけおりました。
紀元前三年、八月一日。
日のみ子さまから、兄猾への軍使のご命令をうける、一日前のことです。

『古事記』

故爾に宇陀に、兄宇迦斯(兄猾)弟宇迦斯二人ありけり。かれ先づ八咫烏を遣はして、二人に問はしめたまはく、今、天つ神の御子幸行ませり、汝等仕へまつらむや。ここに兄宇迦斯鳴鏑を以ちて、其の御使を待ち射返しき。故其の鳴鏑の落ちたりし地を訶夫羅前と謂ふ。

道(みち)

阿太の邑をぬけると、道は、それからずつと平になつて、吉野の川ぞひに南へ、白い色紙をのべたやうに、まがりくねつて、つづいてゐました。

シホカラトンボがとんでゐたり、コマツナギの花が咲いてゐたり、コガネグモがヒメシヲンの葉から葉へ、あの、はりの強い、ほそくすきとほつた、まるい網をかけてゐたりする。そんな、目になれた景色をさへ、もう、いく十日ものあひだ、菟田から西へ西への、山ばかりつづいた、じめ〳〵とくらい旅路にばかり、おすごしあそばした神々さまは、まるで、生まれてはじめて見た景色でもあるかのやうな、

おどろきと、なつかしさと、よろこびを、おおぼえになりました。

暑い日ざかりでした。

どの神さま方も、陽にやけて、お黒くおなりあそばしたお顔に、びつしよりと汗をかいてをられました。

あかるい花の咲きこぼれた吉野の景色は、ことのほか、神さま方のお心に召したとみえ、お聲の美しい、歌のおすきな大久米命さまは、兩のお手を高くおのばしになつて、はじめの一ふしをおうたひになりました。

菟田の　高城に　鳴わな張る

神さま方は、すぐあとにつづいて、おうたひになりました。うれしさで一ぱいであることが、そのあかるいお聲と、かるいお調子に、うき〳〵とみえてゐました。

我が待つや　鳴はさやらず
いちくはし　くぢらさやる

こなみが　な乞はさば
立そばの實の　無けくを
こきし　ひゑね

うはなりが　な乞はさば
いちさかき實の　多けくを
こきた　ひゑね

歌は野づらをわたり、川をこえて、ひろ〳〵ときえていきました。

えゝしや　こしや
あゝしや　こしや

道臣命さまは、お手をふりながら、天富命さまは、野の花をかざしながら、そして、ほかの神さま方は、お足で拍子をおとりになりま

した。

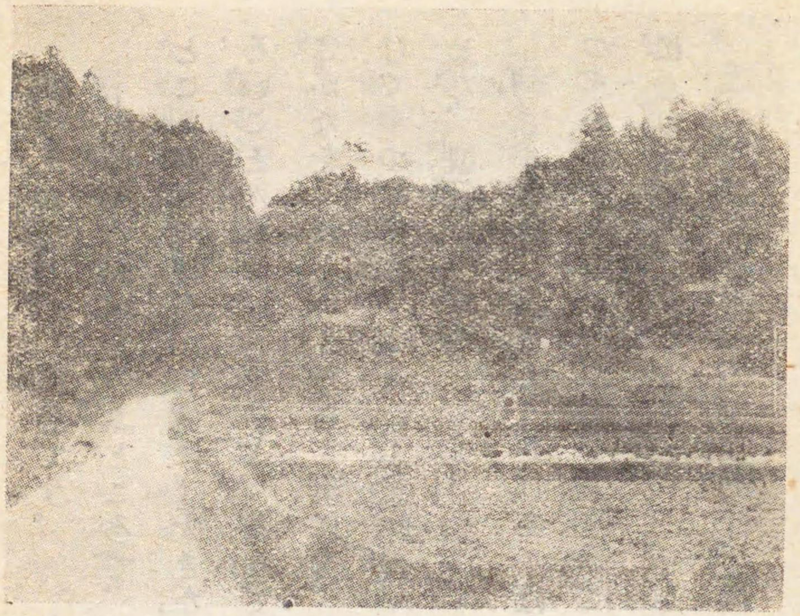
神々さまは、お心の底の底から、おうれしかつたのです。

菟田の高城にすんでゐた、猾の一族を平げて、まだ、まもない今日です。

一族ををさめてゐた兄の兄猾、弟の弟猾は、そろつて力のすぐれた隼のやうに、すばやい豪族でした。

ことに、天險に陣をかまへて、皇軍をむかへうたうとこころみ、それが危くなると、吊天井式の押機を行宮に仕掛けて、降服をよそほひながら、ひそかに日のみ子さまをむかへて、一軍を、この押機の下にしようとさへ考へたほどの、謀にたくみな一族だつたのです。

もちろん、日の軍に敵すべくもなく、勇猛な道臣命さまのために悪



邑穿田菟蹟聖皇天武神

計をみやぶられて、つひに、自分で作つた押機におしつぶされて、見苦しい最後をとげたばかりです。

弟猾は、はやくから、日のみ子さまの軍につかへて、めぐみのもとに、たのしい生活をおくつてはゐましたが、何にしても、兄猾を滅したことは愉快なことだつたにちがひありません。

歌はそのをりの、御製です。

——菟田の高城といふところで、わなをかけて、鳴をとらうとしたところが、鳴はかからずに、大きな鷹がかかつた。何といふ、おもしろいことだらう。さあ〳〵、それでは料理をして、たべませうかな。さかなをくれといふなら、妻にも、知りべにも、たくさんたくさんわけてやつてくれ——といふ意味の、愉快さを、心からおうたひあそばした、凱歌でした。

神さま方は、歌をおうたひあそばしながら、その日のことを、つぎつぎお思ひうかべになり、よけいに、たのしく、お聲を、おはりあげになりました。

このたびの吉野への御巡幸は、ほんの近衛の兵ばかりを、おつれあ

そばしての、小部隊でした。日向を出發して以來、日のみ子さまの、もつともお近くにつかへまつつて、苦樂をともにした方々ばかりです。ですから、そのおよろこびの深さも同じであり、思ひ出もまた、同じ深さでありました。

「や、大久米命さま、お肩にシホカラトンボがとまつてゐますよ。」

歌は、その聲でぷつつりときれて、どつと大きな笑ひにかはりました。

「なに？　トンボが？　これこれ、私の肩に氣をつけるまへに、そなたの頭に氣をつけることぢやよ。ほれ、頭、頭。」

教へた神さまが、又教へられて、頭にお手をおあげになりました。

「おや、そなたも。」

「おや、そなたも。」
「なに、そなたこそぢや。」
これは又、なんといふ、數の多いシホカラトンボ。
そして、あかるい景色。あかるい氣持。
「では、このあたりで、お晝にいたさう。」
神さま方は、めい〳〵、そこいらの土をおほりになつて、お米をたく準備をなさいました。
たきぎをおあつめになる神さま。
柏の葉のつづりあはせたお皿。
ひらか、いつべ——の準備。

いそがしくとも、たのしいお働きです。
どの神さまも、たれ一人、お手を休めておいでになる方はありません。
岸をおりて、水をおくみになる神さま。
煙にむせて、こん〳〵とおせきをなさる神さま。
草や木の芽をおそろへになる神さま。
大久米命さまは、いそがしく、神さまのお數をおしらべです。
お一人、お二人、お三人——。
小部隊です。
「おや……」

お首をおかしげになつて、もう一どおしらべです。
お一人、お二人、お三人――。
「たらぬ。お一人。はてな。」
お首をおかしげになつて、もう一どおしらべです。
「たらぬ。たしかにお一人。はて、どなたであらう。」
命さまは、丹念に、こんどは、お一人お一人のお顔をおしらべになりました。
「さうだ。椎根津彦さまだ。」
命さまは、丘からかけおりると、日のみ子さまのお休みあそばす、杉の木かげへ走らうとなさいましたが、すぐ思ひついたやうに、おたちどまりになりました。

「み心をなやましてはならぬ。さがさう。おおくれになつてゐるのにちがひない。お足がいたむのだらうか――、お腹をこはしておいでだらうか――。いや、ともかく一大事だ。さがしてこよう。」
命さまは、どなたにも、そのことを仰せにならずに、ただお一人でもときた道を、一さんにおかけもどりになりました。
「椎根津さま――。椎根津さま――。」
「おーい。」
たしかにお聲がしたやうです。
「風のせいだらうか。こだまの聲だらうか。」
命さまは、おたちどまりになると、まへよりも大きくお叫びになりました。

「椎根津さま――。」
「おーい。」
「あ、聞えた。たしかに聞えた。はて、どこだらう。」
丘が幾重にもかさなつてゐました。
「どこだ――。」
「ここだ。」
「どこだ。」
「檀の木が見えぬかのう――。」
「見える。」
「その、ま下だ。」
「おゝ。」

命さまは、丘をのぼり、丘をくだり、息せききつて、三つの丘をおこしあそばしました。
檀の木がありました。そのま下に、うづくまつておいでになる椎根津彦さまの姿が見えました。
「どうしたのだ。おくれたりして。お足か――お頭か……お腹か……どこがいたむのだ……。」
「どこも、いたくはありません。」
「ひもじいのか。暑さに目がくらむのか……。」
「どちらでもありません。」
「はて、では一體どうしたのだ。そんなところにしやがんだりして。みなの者が心配をする。いや、みなの者はいいとしても、日のみ子さ

まが、ご心配あそばすぞ。」
「すみませんでした。」
「さあ行かう。もうみんなで待つてゐるかも知れない。」
「もう少し。」
「もう少し……。なにをしてゐるのだ。」
「すぐすみます。もうしばらくです。水はありませんか。」
「水……。一たいなにをしてゐるのだ。」
命さまは、椎根津彦さまの肩ごしに、おのぞきになりました。
「なんだ、木を植ゑてゐるのか。」
「さうです。」
「どうしたといふのだ。こんなところに木を植ゑたりなんかして。」

「道だからです。たれもがとほる道だからです。」
「わからぬ。」
「道だからです。千年萬年、子孫がとほる道だからです。神さまのとほつた道は、こんなにも美しい道だつたと、子孫に敎へたいからです。日本の道は美しくなければなりません。日のみ子さまがお開きあそばした道だからです。ごらんなさい。この橿の芽は、小指にもたりません。だが、日の國は幾萬年もつづく國です。幾萬年後には、この橿の芽さへ、天にとどくほど大きくなります。春も秋も、橿は道に大きな影を作ります。子孫がその影に休んだ時、きつと神の恵みを知ることでせう。仰いで、青空にとどくほどの梢を見あげた時、きつと、神の大きさを知ることでせう。私の生命は、この木とともに永遠に生きます。」

「わかつたぞ。わかつたぞ。」
「おわかりくださいましたか。神の生命は永遠です。」
「さうだ。さうだ。」
「日の道を美しくするのが、私の役目です。日の道を開くことは、私の役目です。」
「さうだ。そして私の役目だ。」
「さうです。神全體の役目です。日の民全體の役目です。子孫にのこすための、ただ一つの教へです。」
命さまは、土の一ぱいついた椎根津彦さまの兩のお手を、しつかり、おにぎりあそばしました。
「手に土をつけ、手にきづをつけても、子孫のために、美しい道を作

つてやらねばならない。大きな木影を作つてやらねばならない。八紘全體に、木を植ゑるのだ。日のみ子さまのおめぐみを、深く深く植ゑるのだ。なあ、椎根津彦、私にも一本植ゑさせてくれ。」
丘をこえて、お二人の神さまは、阿太の邑へお急ぎなさいました。
歌をおうたひになつて。晴々とあそばして。
お二人の神さまの、がつしりと大きい兩のお手に、かくれるほどの小さな橿の苗木が、三本ほどにぎられてゐました。
・え〻しや　こしや。
あ〻しや　こしや。

風にのつて、神々さまのお歌がながれてまゐります。

青い空。

青い水。

青さばかりの景色の中央を、白い色紙をのべたやうな吉野の道が、まぶしく見えてゐました。美しい、あかるい道です。

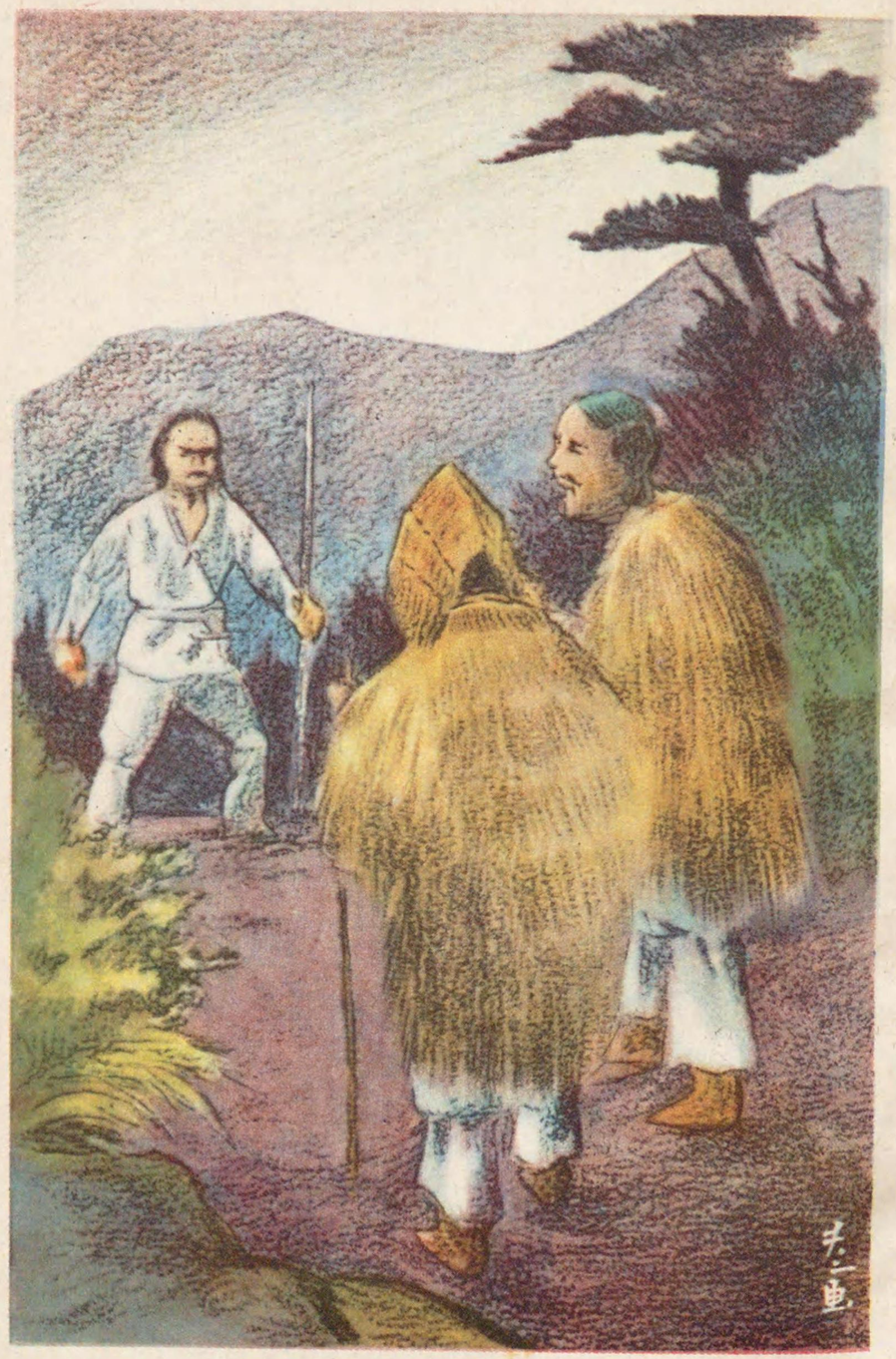
お二人は、遠いお聲にあはせて、おうたひになりました。

えゝしや　こしや。

あゝしや　こしや。

【日本書紀】

是の後に、天皇吉野の地を省そなはしめむと欲して、乃ち菟田穿邑より親ら輕　兵を率ゐて巡幸ます。吉野に至りたまふ時に、人有りて井の中より出でたり。光りて尾あり。天皇問ひて曰く。汝は何人ぞ。對へて曰く、臣は是れ國神なり、名を井光といふ。此れ則ち吉野首部の始祖なり。更少しく進くときに、亦尾ありて磐石を披けて出づる者あり。天皇問ひて曰く、汝は何人ぞ。對へて曰く、臣は是れ磐排別が子なり。此れ則ち吉野國樔部の始祖なり。水に緣ひて西のかたに行くに及びて、亦梁を作ちて取魚する者あり。天皇問ひたまふ。對へて曰く、臣は是れ苞苴擔が子なり。此れ則ち阿太の養鷬部が始祖なり。



霧（きり）

霧が流れてゐました。

ふかぶかと、景色のはてまで、霧が流れてゐました。

霧の底に、コホロギがないてゐました。

夜もすがら、なきとほしたはずなのに、少しのおとろへも、にごりもみせない聲でした。

すみきつて、幾千とも知れないコホロギが、目に見えない景色をつづりあはせてゐました。

幾千とも、一つ一つちがつた聲でした。

めい〳〵の身體の大きさ、ふとさ、強さに、ふさわしい、はりと、

ひびきをもつてないてゐました。

乳色の霧は、やがて、ほんのしばらくのあひだ、紫色となり、まもなく急にそれが青磁色にかはりました。

まるで水底のやうな色でした。

青磁色の霧は、あるかないかの風に、流れてゐました。少しづつ、そして正しく。

日の出に近くなりました。

「まるで魚のやうだ。」

椎根津彦さまは、さういつて笑ひながら、お手をヒレのやうに、霧の中でお動かしなさいました。

魚といへば、お供の弟猾も、しつとりと霧にぬれて、お二人とも、

肩が、すつかり、しめつてゐました。

霧は、ます〳〵ふかく流れます。しづかに、南へ。

さや〳〵と、芒の葉づれの音が聞えてきました。

「夜があけてくるらしい。」

椎根津彦さまは、たちどまつて、霧の色と、流れるはやさを、じつとごらんになりました。

「今日も上天氣らしい。一點の雲もない秋晴れとなるらしい。朝風が心の底まで、すがすがと、しみとほるからな。」

やぶれた着物のえりを、おかきあはせになりながら、椎根津彦さまは、ひとりごとのやうに、さうおつぶやきになりました。

吉野地方の御巡幸も、おんつつがなくおすませあそばしました。

ことに、御沿道では、思ひがけもなく、井光、にへもち、いはおし、わくなどの一族の、忠誠あふるるお出迎へをおうけあそばして、日のみ子さまの、およろこびも、おんひとしほりではありませんでした。

ご満足のうちに、ふたたび菟田へ、おかへりあそばしたのは、九月のはじめ、秋風のたちそむる頃でした。

野にはツユクサが眞盛りで、谷のヌルデも、やや黄ばんでゐました。

五日。

めづらしい秋晴れでした。

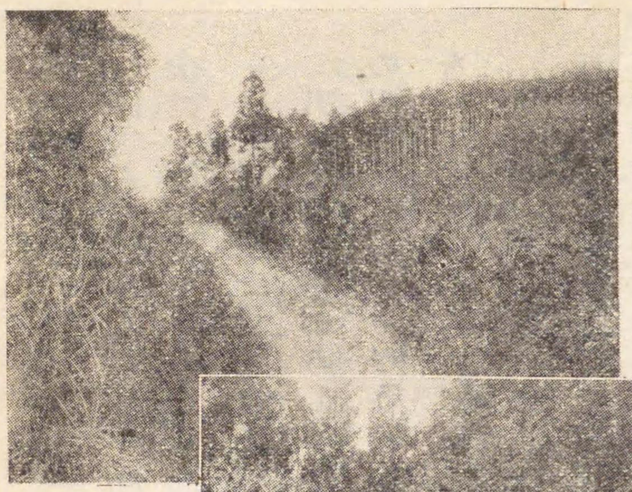
日のみ子さまはその日、高倉山の頂にお登りあそばしました。高城の大本營からは、西北へ約四キロを距ててゐます。

麓から百メートルたらずの山ではありましたが、その頂に登ると、秋の陽にかがやく大和の風景が、手にとるやうに晴々と見わたすことが出來ました。

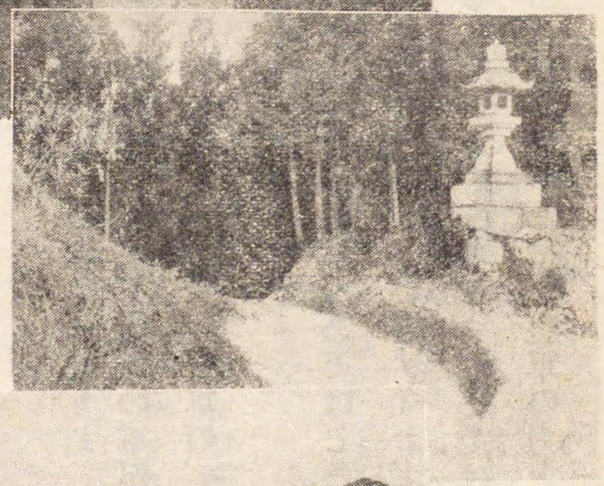
西へさらに四キロ、雲をしのいで、そびえてゐるのが國見岳で、經ケ塚、音石の峯々が、天嶮をほこつて、つづいてゐます。

ここに城塞を築いてゐたのが、八十梟帥といふ勇猛な一族でした。八十梟帥と一口によばれてゐる一族の中にも、磯城の八十梟帥、赤銅の八十梟帥、熊襲梟帥、川上梟帥などの、梟帥類があつて、これらが峯々に、谷々に、雲のごとくむらがつてゐました。

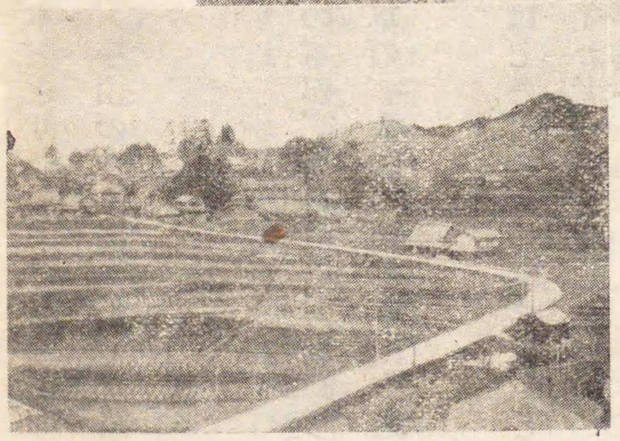
ことに、女坂には、女軍をおき、男坂には男軍をおいて、針道峠から經ケ塚、音石山、半坂峠をむすぶ防禦線をはりめぐらすとともに、



女坂傳稱地



男坂傳稱地



墨坂傳稱地

さらに、宇陀川の西につらなる墨坂には、木をきりつんで、晝も夜も
どん〳〵と火をたき、眞赤に燒けた炭火を、小山のやうにつんで、路
をさへぎつてゐました。

そればかりではありません。

八十梟帥の軍のうしろの方には、兄磯城の軍が、磐余邑に、長髓彥
の軍が、さらにそのうしろにひかへて、皇軍の、大和の中部へ出る道
を、すべて、ふさいでゐました。

これらの樣子を、山上から、どらんあそばした日のみ子さまは、ど
うして、この難關をやぶらうかと、いろ〳〵お考へあそばしました。
その日から、お夢にも、み心をなやましあそばしました。
攻めて打ちやぶるには、けつして、皇軍の力をもつてして、むづか

しいことではありません。けれども、もと〳〵、皇軍は、ただ武力を
のみ用ひるのが、ほんたうの目的ではなく、出來れば、じゆん〳〵と
日のみ子さまのみ心を語り、おめぐみを敎へ、心からつきしたがつて
くる日をお待ちあそばすのが、今日までのふかい尊い、戰の姿でした。

そして又、これが神の武でもありました。

神の尊さを知らず、これを祭ることを知らぬ種族が、その頃どんな
に多かつたことでせう。だが、一たび心をあらため、神にまつろふこ
とをちかつた者にたいしては、日のみ子さまは、ことに厚くおもちひ
あそばしました。

日のみ子さまのおめぐみは、太陽のそれに似て、ぢりぢりとふかく、
ほの〴〵と大きく、人々の心の底にとけていきました。

どう教へても、つきしたがはぬ者にたいしては、斷乎として、神劍によつて、お打ちあそばしました。

教ふるも、打つも、ともに日のみ子さまのおめぐみにほかならなかつたのです。

和魂と荒魂は、神武の精神の兩面であり、日本精神の兩面であります。

あたたかい春の陽のめぐみも、ふきすさぶ冬の嵐のめぐみも、ともに、植物を育てあげる上に、なくてはならぬ二つのめぐみであることに似てゐます。

梟帥を打つべし！　斷乎として。

梟帥を教ふべし！　じゆん〳〵として。

打つべし！

教ふべし！

日のみ子さまは、こよひも、日の國の行く道を、天つ神にお祈りあそばしました。

「安心するがいい。道をあやまつてはならない。まづ天香山のみ社の中の埴土をとり、それをもつて、天平瓮といふ皿を八十枚、それから酒をもる嚴瓮といふ祭器を作りなさい。そして、天地の神々さまを、心からおまつりして、お祈りまうすのです。さうすれば、惡者どもは、自然と、たひらぐでありませう。」

天つ神のおつげがありました。

日のみ子さまを守り、日の國の千代八千代をお祈りあそばして、日も夜も、幸をのみ恵みたまふ天つ神の、おごそかにも尊いおつげです。

日のみ子さまは、おん夢さめて、あまりのかたじけなさに、おもはず、おなみだをおうかべあそばしました。

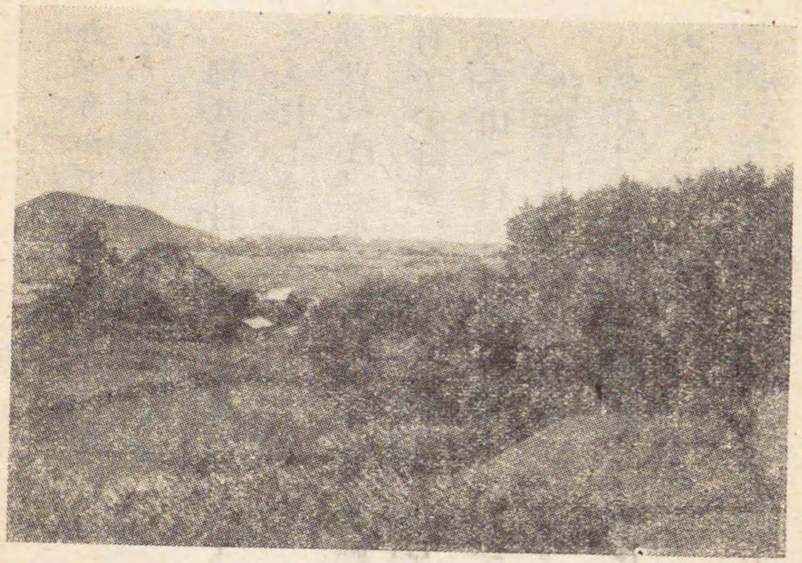
ところが、その同じ日、忠誠をちかつて、今は皇軍の一人として、身命をささげてゐる弟猾からも、同じ奏上がありました。

このあたりの地理にくはしい弟猾です。

日のみ子さまは、一そうおよろこびあそばしました。

埴土とりは、その日のうちに決定しました。

そして、この道案内には、弟猾がたち、椎根津彦さまが、決死の覺悟で、天香山に潜行あそばすことになつたのです。



天香山埴安傳稱地

「椎根津彦は、ことさらに、ぼろ〳〵になつた、やぶれ着物をつけ、蓑笠をきて、お爺さんに裝へ。又、弟猾も、蓑をせおつて、お婆さんに姿をかへるのだ。無事に天香山にしのび入れ。そして、その頂きにある埴土をもちかへるのだ。賊を平定して、大業をなしとげるかどうかは、汝等が、首尾よくこれをはたす

かどうかで、うらなふであらう。よくよく道すぢを注意して行くやうに。」

仰せをうけて、二人はさつそく、お爺さんとお婆さんに姿をかへることにしました。

思へば、水ももらさぬ敵の堅陣を突破し、經ケ塚山から音石山にかけての峰を、西にこえ、さらに兄磯城、弟磯城の根據地を通過して、天香山へ行きつかうとするのです。

決死――まつたくの決死です。

だが、日の國の行すゑのために、命をささげることこそ、男の仕事ではないでせうか。

たとひ、この身はこなごなにくだけちらうとも、その礎の上に、日

の國が榮えゆくといふなら、あゝ、その死こそ、永遠の生命といへないでせうか。

椎根津彦さまは、感激で目がしらをあつくしておいでであそばした。

弟猾もまた、

「行かう、命にかけて。」

おさしだしになつた椎根津彦さまのお手が、かすかにふるへてゐるやうでした。

一日一夜。

さらに一日一夜。

今は夜明けです。

ふかい霧の夜明けです。

椎根津彦さまは、やぶれた着物のえりを、そつとおかきあはせになると、かむつてゐた笠を、おとりになりました。

「弟猾、夜明けが近くなつた。日のみ子さまは、きつとお夢の中でも私たちをお案じくださるにちがひない。お祈りをしようぞ。」

さだかには見えませんが、高城は、たしかに東のはずです。

二人は、霧の中にひざまづいて、目をとぢました。

「わが大君さまが、この國を平定したまふものならば、何とぞ無事にこの道を開かせたまへ。」

ひざの下に、霧にぬれたツユクサの、青い小さい花が咲いてゐました。

「弟猾、花が咲いてゐる。ひざの下に。」

弟猾は、その一つををりとつて、椎根津彦さまにささげました。

「笠にさして行かう。このお使ひには、何よりも、やさしさが必要だ。花の心を、私の心にせねばならない。日のみ子さまのお心も、きつとさうだと思ふ。」

二人はたちあがりました。

「弟猾、霧が流れてゐるだらう。お陽さまの光も見えないほどに。」

弟猾は、お話の意味をはかりかねて、きよとんと、椎根津彦さまのお口もとをながめました。

「弟猾、光が見えないから、今日はお陽さまが出ておいでにならぬと思ふかの。」

「いいえ、たとひ光は見えずとも、お日さまは空にかがやいておいでです。」
「きつとか。」
「さうです。」
「よし！　では、も一つたづねるが、私たちは今、なぜお陽さまのお姿ををがめないのだ。」
「霧があるからです。霧さへ晴れれば、美しいお陽さまを、まつすぐをがむことが出來ます。」
「霧がたとひ流れてゐようとも、お陽さまは、きつと、かがやいていらつしやる。見えないのは、霧があるからだ。わかるな。」
「わかります。」

「お陽さまの光は、まことの光だ。お陽さまの光には、うそや、いつはりがない。うそや、いつはりは、霧の中にあるのだ。」
「わかります。」
「日のみ子さまの光は、お陽さまの光だ。ただ一つの光だ。美しい光だ。まことの光だ。あなたには、日のみ子さまの光がわかるか。」
「わかります。」
「をがめるな。」
「をがめます。」
「うん、うれしいことだ。だが弟猾、あなたには、はじめから、その光がわからなかつたらう。」
弟猾は、しばらく考へてゐましたが、強くうなづきました。

「さうでした。わかつたのは、をがめたのは、八咫烏さまに教へられてからのことです。」
「さうだつたな。」
「わかりました。わかりました。私の心に、あの頃、ふかい霧が流れてゐたからです。今日のやうなふかい霧が。」
「あはは、霧が流れてゐたのか。だが、晴れてよかつたの。」
「さうです。晴れたおかげで、幸福になれたのです。」
「どんな霧だつた。その霧は……。」
「わがままです。」
「それから……。」
「自分一人のことを考へてゐました。」

「それから……。」
「一人で生きて行けると考へてゐました。神々さまに生かされてゐることを忘れてゐました。」
「それから……。」
「神さまをぞんじませんでした。」
「それから……。」
「臣民の道をぞんじませんでした。」
「たとへば……。」
「國民の一人であるといふことを。」
「たとへば……。」
「私の生命が、國の生命の中にとけてゐるといふことを。」

「うん、霧がふかい。そのふかさでは、とてもわかるまい。兄さんもさうだつたのう。」
「兄猾は、心に霧をもつたまま、死んでしまひました。かはいさうな兄でした。」
「霧のかゝつた心をもつてゐる人々が、まだ〳〵多い。八十梟帥もさうだ。」
「だが、きつと霧は晴れます。」
「さうだ。日の光にあへば、きつと霧はきえる。日の光は、霧をけさずにおかぬ光だ。」
「もうすぐですね。」
「もうすぐだ。やがて、うら〳〵と、この大八州は、日のみ子さまの

お光の下にかがやくのだ。霧が晴れて、ただあかるい景色のみとなる。」
「私たちのこの仕事は、そのためですね。」
「さうだ。お光をひろめるためだ。霧をけす仕事だ。だから……。」
「命をかけても、やりとげたいとおもひます。」
「やる。きつとやるぞ。」
その時でした。だしぬけに、
「待て！　とまれ！」
霧の中から、一隊の梟帥が、影のやうにうかびあがりました。手にするどい石刀を持つてゐました。
聲をあげるひまもありませんでした。
「あやしい奴等だ。日の軍のものか……。」

「どこへ行く。」
「名をいへ。」
矢のやうに、するどい聲が、一度に二人をつつみました。
弟猾は、あとへ一歩さがりました。もしもの事があれば、隼のやうなはやさで、敵をたふさうと考へたのです。
だが、椎根津彦さまは、おちついてゐました。
「お婆さん。さあ、急ぎませうぞ。」
ゆつくりと、齒ぎれのわるい、ふくみ聲でした。どこから出るのかと思ふほど、お爺さんそつくりの聲でした。
弟猾は、とつさに、かまへをといて、これもお婆さんにかへりました。

「お婆さん、さあ、急ぎませうぞ。」
「待てといつてゐるのだ。聞えないのか。」
「はい、ふかい霧でございますな。」
「霧の話ではない。名をいへ、どこの者だ。」
「さあ、もうすぐ夜明けでございませう。夜が明ければ、霧も晴れませう。はい、今日は上々吉のお天氣でございますよ。」
「なにをいつてゐるのだ。天氣の話ではないぞ。どこから來たかと、たづねてゐるのだ。」
「なあに、これでございますか。これは、つひさつき、そこでとりましたツユクサの花でございます。おいりやうなら、さし上げてもよろしうございます。」

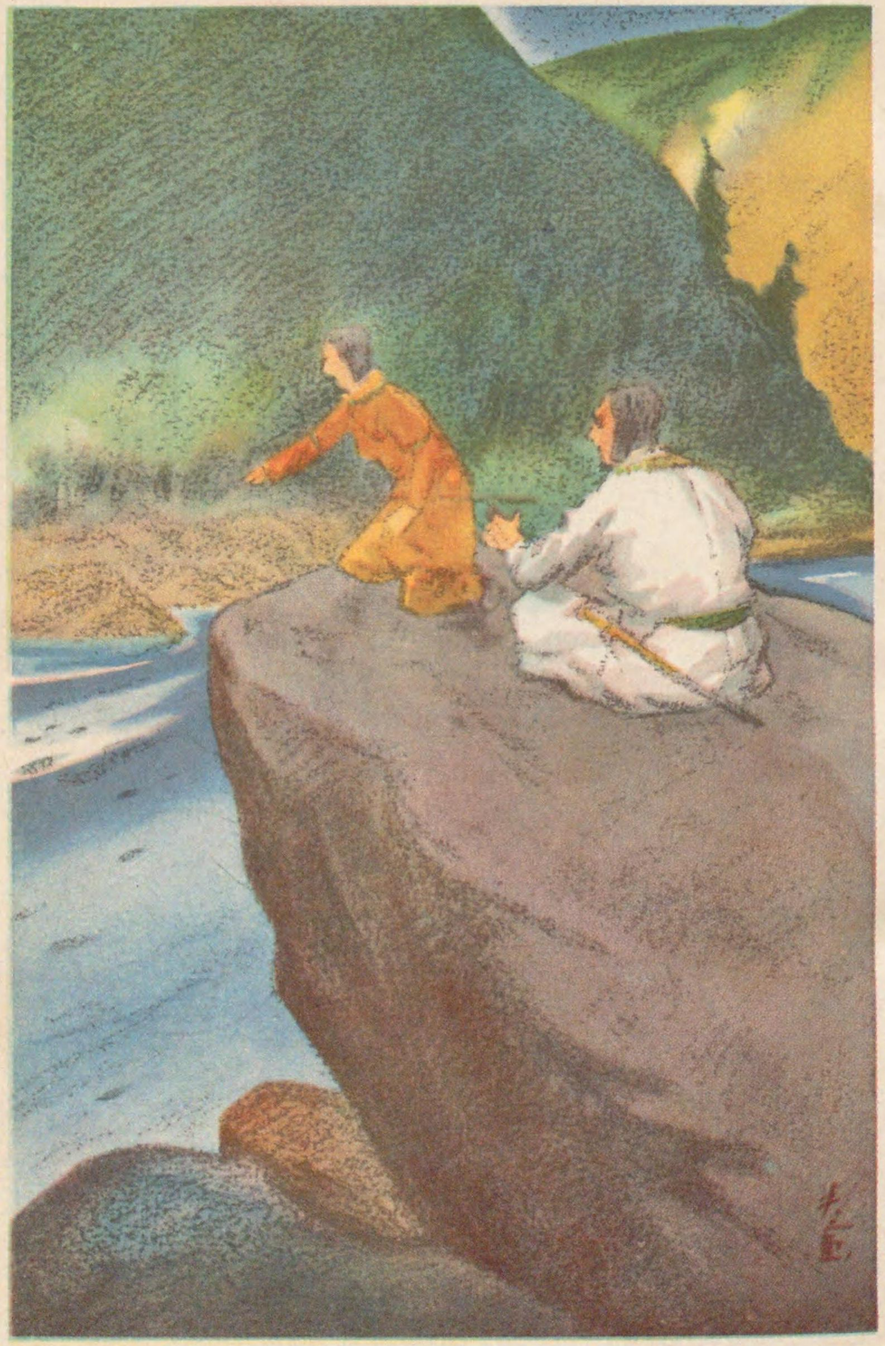
「だめだ、だめだ、こいつ、つんぼだよ。」
梟帥は、大聲あげて笑ひこけました。
「どうだ、弟猾うまいもんだらう。」
「感心しました。ほんとのつんぼのやうで。」
「あははは、梟帥はみんなあんな者だ。だましたのは悪いが、あれでうまくだまされた梟帥も悪い。あははは。」
「夜があければ、霧が晴れませう——。わかりますかな、その意味が梟帥に。」
「わかるまい。まだ夜中の人々だから。だが、すぐ夜明けだ。大八州の夜明けだ。あの人々のふかい霧もすぐ晴れよう。」

霧が流れてゐました
青磁色の霧は、もとの乳色にかはつてゐました。夜明けです。もうすぐ夜明けです。
霧の底で、コホロギがないてゐました。

【日本書紀】

九月甲子朔戊辰、天皇彼の菟田の高倉山の巓に陟りまして、域中を瞻望たまふ。時に國見岳の上に則ち八十梟帥あり。又、女坂に女軍を置き、男坂に男軍を置き、墨坂に妹炭を置く。其の女坂、男坂、墨坂の號は此に由りて起れり。復た兄磯城の軍ありて、磐余邑に布滿めり。賊虜の據る所、皆是れ要害の地なり。故れ道路絶塞りて通るべき處無し。天皇惡みたまふ。是夜自ら祈ひて寢ませり。夢みたまはく、天神あり、訓へまつりて曰く、宣べ天香山の社の中の土を取り、以て天平瓮八十枚を造り、幷せて嚴瓮を造りて、天神地祇を敬ひ祭れ。亦嚴呪詛を爲よ。此の如くせば、則ち虜自らに平伏ひなむ。天皇祇みて夢の訓を承りたまひて、依りて以て行はむとしたまふ。時に弟猾又奏して曰さく、倭國の磯城邑に磯城八十梟帥あり。又高尾張邑

に赤銅八十梟帥あり。此の類、皆天皇と距ぎ戰はむと欲す。臣竊に天皇の爲に憂へまつる。宜べ今當に天香山の埴を取り、以て天平瓮を造りて、天社國社の神を祭ひて、然して後に虜を擊ちたまはば、則ち除ひ易けむといふ。天皇既に夢辭を以て吉兆なりと爲たまふ。弟猾の言を聞しめすに及びて、益懷に喜びたまふ。乃ち椎根津彦に弊しき衣服及び蓑笠を着せて、老父の貌に爲らしめ、又弟猾に蓑を被けて、老嫗の貌に爲らしめ、勅して曰く、宜べ汝二人天香山に到きて、潛に其の巓の土を取りて來り旋れ。基業の成否は、當に汝を以て占はむ。努力愼め。是の時に虜兵路に滿みて、以て往還ふこと難し。時に椎根津彦乃ち祈ひて曰く、我皇、能く此の國を定めたまふべきならば、行かむ路自ら通れ。如し能はずば、賊必ず防禦がむ。言ひ訖りて徑に去く。時に群虜二人を見て、大に咲いて曰く、大醜や老父老嫗と。則ち相與に道を闢りて行かしむ。二人其の山に至ること



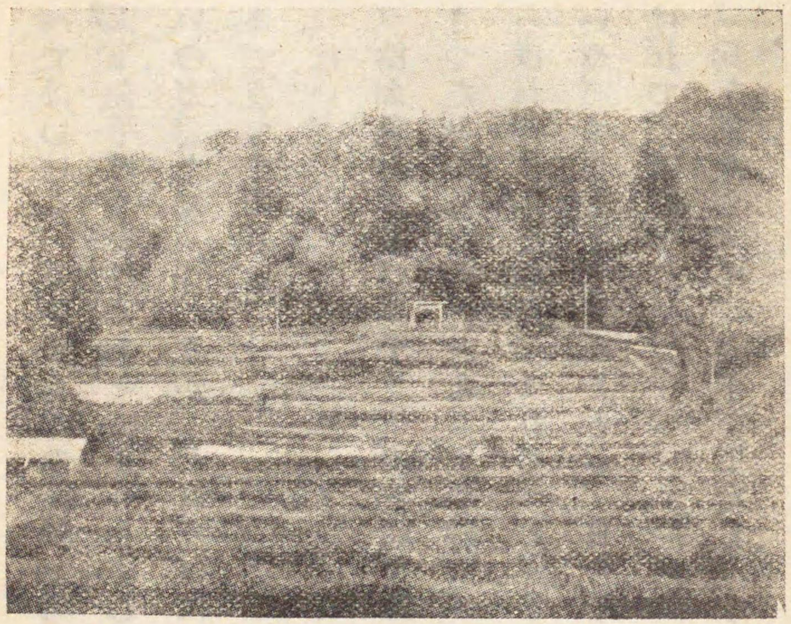
を得て、土(はに)を取りて來歸(まうかへ)れり。

祭

「だいぢやうぶでせうか。」
「なにが……」
「私たちが待つてゐる――魚のことです。」
「ほう、うかび上らぬといふのかな……。」
「……ひよつとすると……。」
「だめかも知れない……と、思ふのかな……。」
「はい。」
「さうか、おまへは、まだ、うたがつてゐるのだな。」
「いえ、うたがふなんて、そんな……。」

「だめだ。ひよつとすると、と今もまうしたではないか。では、さきの朝原の時はどうだつた。」
「あの時も、やはり……。」
「うたがつてゐたのだな。」
「はい。」
「だが、立派に出來あがつたではないか。水をまぜないで飴が作れたではないか。」
「はい。」
「こんどだつて同じことだ。うかび上るよ、魚が、きつとな。安心しろ、安心しろ。」
「でも、埴で作つた壺を川にしづめただけで、川の魚が、木の葉を流

すやうに、醉ふて流れるものでせうか。」
「さあ。」
「椎根津彦さま、さあ、なんてそんな、たよりないお返事をなさるものではありません。教へてください。そのわけを。」
「わけ……。わけなどない。先の時も、平瓮の上で、水のない飴が出來たのだ。あれにもわけはなかつたではないか。」
「さうでした、見る見るうちに出來あがりました。この眼のまへで。」
「同じことだ。同じことだ。」
「さうでせうか。」
「わけをたづねるのは、うたがひがあるからだ。祈りの心には、わけがない、日のみ子さまの、ふかいふかいお祈りが、一つのおん形をあ



苑田之朝原傳稱地

らはしたまでで、飴に不思議はないのだ。」
「はい。」
「弟猾、おまへは、飴や魚ばかりを考へるから、不思議になるのだ。日のみ子さまの、あの火のやうなお祈りのお心を考へてみよ。あのお心のまへには、どんな不思議も不思議でなくなるのだ。ものの形ばかりを考

へてはいけない。そのものの精神を考へるのだ。日のみ子さまには、天下を平けく安けくあそばさうとする、ただそれだけのお祈りしかないのだ。ただ一つ。だが、それだけに、それは強くふかく、お生命にまでなつてゐる。」

「はい。」

「飴も魚も、日のみ子さまのお祈りにたいして、天つ神がお示しくださつたみ心だ。いいかな。天つ神の、み心が、一つのお形となつてあらはれたまふたのだ。これさへわかると、なんの不思議でもなくなる。いや、もつと不思議なことが、日のみ子さまのお祈りによつて、あらはれてくるぞ。」

「兵を動かさずに、天下を平定しよう——と、日のみ子さまは、いつ

も仰せになつてをられます。」

「深いみ心がわかるか。神のみ心がわかるか。おまへにも。」

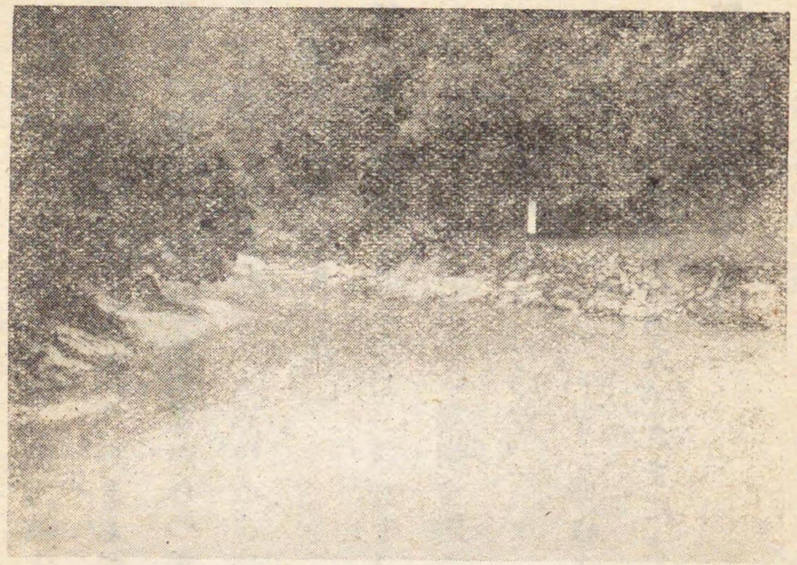
「わかります。」

「それが、不思議の一つなのだ。兵を用ひずに、天下をご平定になる——これは、天つ神と、ご一體にならせられて、まつたく、天つ神のみ心におなりあそばして、民をめぐまうとあそばす、みしるしなのだ。おまへは、日のみ子さまが、どんなおん時にも、天つ神を祈らせたまふことを知つてゐるな。」

「ぞんじてをります。」

「お祈りあそばすのは、天つ神のみ心を、をがまんおんため、みつげを聞かんおんため、すなはち、天つ神の心のまにまに、すべてをあそ

ばさん思召からなのだ。祈りを忘れてはならぬぞ。祈りは、日の民の
もつとも、大きな道だ。」
「わかります。」
「よし、さあ、それでは、もうすぐだ。」
椎根津彦さまと弟猾は、丹生川の川岸の、大きな岩の上に、じつと
すわつてゐます。
おほひかぶさるやうな山の緑です。
その緑にかこまれて、夢ケ淵のふかい水が、青くよどんでゐます。
目のみ子さまが、神をお祈りになつて、
「今、嚴瓮を丹生川にしづめて、川の魚が、木の葉を流すやうに醉ふ
て流れたならば、我、かならず天下を平定することの、みしるしであ



上川生丹蹟聖皇天武神

る。」
と、仰せられて、その魚見の役を椎根津彦さまにお命じになりました。
弟猾とともに、天香山でいただいた、あの埴土で作られた嚴瓮です。
「おゝ！」
弟猾は叫んで、立ちあがりました。
魚です。

魚です。

木の葉を流すやうに、ただよふて流れてゐます。一匹、二匹、三匹——。數知れぬ魚が、つぎからつぎへと、岩のまへを流れて行きます。

「弟猾！　見ろ！」

「見ました、見ました。」

「天下ご平定だ！」

「はい！」

「み心が神につうじたのだ。」

「はい。」

「さあ、行かう。日のみ子さまにまうしあげるのだ。魚が——魚が——醉ふて流れますと。」

「はい。」

二人は、かけ出しました。

天下ご平定、天下ご平定と叫びながら。

まもなく、丹生川上の眞榊を根こぎにして、それを立て、神々への感謝のお祭が、とり行はせられました。

「顯齊」のご神事です。

日のみ子さまが、おんみづから高皇座靈尊となりたまひ、齊主には道臣命さまが、ご命令によつて、おなりあそばしました。顯齊とは、目に見えぬ神を、現在神そのままのすがたにをがんで、お祭りをすることで、日のみ子さまが、神におなりあそばしたわけです。

お祭りの品々も
埴瓮は　嚴瓮の名に
火は　いつのかくつち
水は　いつのみつはのめ
粮物は　いつのうかのめ
薪は　いつのやまづち
草は　いつのぬづち
と、それ〴〵名をたまひました。
國土ご平定のおん門出にあたらせられて、ご武運のいやが上にも、
あがらんことを祈らせたまふたご神事でありました
八十梟帥誅伐は、このお祭りがあつての後のことであります。

【日本書紀】

而して丹生川上に陟りて、用て天神地祇を祭りたまふ。則ち彼の菟田川の朝原に於て、譬ば水沫の如くに咒著くる所あり。天皇又因りて祈ひて曰く、吾れ今當に八十平瓮を以て水無しにして飴を造るべし。飴成らば、則ち吾れ必ず鋒刃の威を假らずして、坐ながら天下を平けむ。乃ち飴を造りたまふ。飴卽ち自らに成りぬ。又祈ひて曰く、吾れ今當に嚴瓮を以て丹生の川に沈めむ。如し魚大小と無く、悉く醉ひて流れこむこと、譬へば猶枝葉の浮流くが如くならば、吾れ必ず能く此の國を定めてむ。如し其れ爾らずば、終して成る所無けむとのたまひて、乃ち嚴瓮を川に沈めたまふ。其の口下に向けり。頃ありて、魚皆浮き出で水のまにまに噞喁。時に椎根津彥見て奏す。天皇大に喜びたまひて、乃ち丹生の川上の五百箇眞坂樹を拔取にして以て諸

神を祭ひたまふ。これより始めて嚴瓮の置あり。時に道臣命に勅すらく、今高皇產靈尊を以て朕れ親ら顯齊を作さむ。汝を用て齊主と爲て、授くるに嚴媛の號を以てせむ。而して其の置ける埴瓮を名づけて嚴瓮と爲し、又火の名をば嚴香來雷と爲し、水の名をば嚴岡象女と爲し、粮の名をば嚴稻魂女と爲し、薪の名をば嚴山雷と爲し、草の名をば嚴野雷と爲したまふ。冬十月癸巳朔、天皇其の嚴瓮の粮を嘗めたまひて、兵を勒へて出でたまふ。

卑

怯

磯城邑にも、霜のおりる日がつづきました。木の葉もおちつくして枯れた葉のかげに、弱りきつたコホロギの聲が、ほそ〳〵と聞えました。にぶい陽の中を、弟磯城は、兄の陣營に急ぎました。

モズが、けたたましくないて、とび去つたあとは、虫の聲ばかりがさむ〳〵と、さびしい道でした。

「私のこの氣持ちが、兄にわかつてもらへるだらうか。私は兄とちがつて、生れつき話をすることが下手だ。心におもつてゐることを、じゆうぶん口に出すことが出來ない。どう話のいと口をきり出さうか。胸の中に、もえさかつてゐるこのよろこびと感激を——いや、日のみ子

さまの、あのふかいお心を、どう話せばいいだらうか。こまつたことだが、私は私のこの眞心で話してみよう。心全體をぶちまけて、ただあるかぎりの眞心で話すことにしよう。眞心——。さうだ、眞心さへもつてをれば、話の下手など問題でなくなるだらう。ことに、血をわけた兄のことだ。心のつながりもあるはずだ。よし、さうすることにしよう。」

弟磯城は、今日のこの大事な使が、はたして、うまく成功するかどうか不安でなりませんでした。だが、眞心をもつて說き聞かせさへすれば、如何にかたくなな兄の心も、いくらかはとけるだらうと、ただ、それだけをあてにして道を急ぎました。

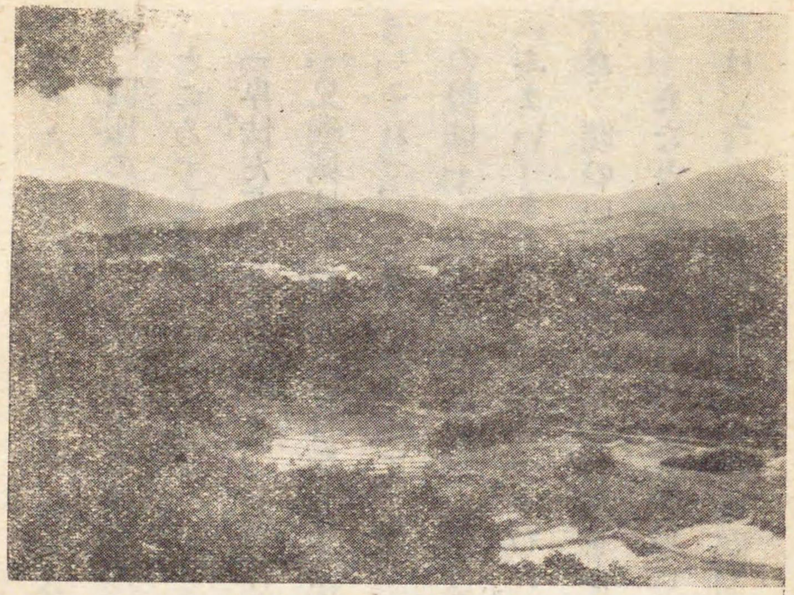
弟磯城は、兄の惡がしこさを、よく知つてゐました。不正直も、眞

心のないことも、よくいつはりをいふことも、小さい頃から見なれ聞きなれてゐました。だから、普通では、この兄を説きふせることが出來ない。ただ火のやうな愛だ、血と血をつなぐ、兄弟のふかい愛のほか道がない。弟磯城は、なみだをもつて、話さうと決心しました。

皇軍に刄向かふ兄磯城を、皇軍に歸順せしめようといふ、大きな使です。

ことに、皇軍の大將がたが口をそろへて、

「打つことは、たやすいことだが、それよりも先に、弟に話させよう。もし、歸順するなら、それにこしたことはないのだし、弟磯城にしても、兄がほろびるのを見るよりは、ともに、よろこんで皇軍の下につきしたがふ方が、どんなにうれしいか知れないだらう。」



神武天皇聖蹟磐余邑推考地

と、いふ情のこもつたお言葉をもつて、はげまして下さつた使ひです。

そのふかい大將がたの情にたいしても、ことに、それを心よくおゆるし下さつた、日のみ子さまのおめぐみにたいしてもやりとげねばならぬ使ひでした。

弟磯城の胸は重く、運ぶ歩みにも力がありませんでした。

「おゝ、弟磯城ではないか。」
圓座の上に、どつかりとすわつて、兄磯城は策戰をめぐらしてゐるところでした。
「卑怯だぞ、おまへは！　日の軍に降つたといふではないか。」
兄磯城は、恐ろしい目をして、弟磯城を睨みつけながら叫びました。
「それで、心をいれかへて、歸つてきたといふのか。どうだ、日の軍の勢は……大したこともなからう。やつぱり、兄磯城の軍には、かなふまい。まあいい、ここへすわれ。今ちやうど策をねつてゐるところだ。頭のいいおまへだ。智慧をかせ、智慧を！」
たたみかけるやうに、兄磯城は、一人で叫びつづけました。弟磯城は、なんにもいふひまがないのです。自分勝手な兄磯城は、自分勝手

で叫んでゐるばかりです。弟磯城は、立つたまま、だまつてゐました。
「ゆるしてやる。ゆるしてやる。さう心配するな、兄弟ではないか。まあ、すわれ、すわれ、立つてゐては話も出來ないぞ。」
「兄さん！」
弟磯城は、兄弟ではないか――といふ、あたたかい言葉を聞いたとき、今だと思ひました。
精一ぱいの元氣をふりしぼつて、一歩まへに出ました。
「歸つたのではない。降伏をすすめにきたのだ。日の軍の勢は、兄さんが考へてゐる三倍も四倍もの力をもつてゐる。それに、天つ神がお守りになつてゐられる。敵ではない。今のうちに降伏するのだ。今のうちなら、日のみ子さまも、おゆるし下さる。」

さう叫ぶと、弟磯城は、力がぬけたやうにぺつたりと、兄磯城のまへにすわりました。

「な、なに！　降伏しろ……。ばかめ！　何をいつてゐるのだ。天つ神とは何だ。向かふに天つ神があれば、こちらには力がある。敵ではないとはなんだ。ばかめ！　この兄の強さがまだわからないのか。」

「わかる。よくわかつてゐる。それで、おそろしいのだ。神を知らない強さは、自滅するだけだ。兄さん！　兄さんには、日のみ子さまの思召がわかつてゐないのだ。」

「だまれ、卑怯者め！　兄磯城はまだ、めぐみをうけた覺えがない。覺えのあるのは、自分の力だけだ。このひろい土、このひろい山、これは自分の力でひらいた土と山だ。だから、ご恩もうけてはゐない。」

「それでも、兄さんは、お日さまのおかげをかうむつてゐるぞ。」

「なに、お日さま……。」

「さうだ。兄さんの土に、兄さんの山に、種子が生え、木が伸びていくのは、たれのおかげだ。それでも自分の力だといふのか……。日のみ子さまは、お日さまのお子さまだ。兄さんは、生まれぬ先からすでに、日のみ子さまの、ご恩をうけてゐたのだ。」

兄磯城は、ぐつと、つまりました。目をむいたまま、だまつて兩手をわな〳〵ふるはせました。弟磯城は今だと思ひました。

私は日のみ子さまにおあひしました。目もくらむほどの尊さだ。兄さんもお目にかかるといい。さうすれば、何もかもわかる。兄さん！」

弟磯城は、ぢりぢりと進みました。

「ばか！」

兄磯城は、いきなり立ち上ると、弟磯城をけたふしました。

「卑怯者だ。おまへは卑怯者だ。おまへは、一人の兄をさへすてて、知らぬ日の軍に降伏しようとしてゐる。兄をすててていいのか。兄が負けて、ほろんでいくのがおもしろいのか。」

「兄さん、何をいふのだ。たつた一人の兄さんだ。その兄さんが負けていいものか、ほろんでいいものか。たつた一人の兄さんだからこそ、私は、その幸福をいのり、命にかけても守らうとしてゐるのだ。」

「守る……守るものがなぜ手向かつてくるのだ。」

「手向かつてはゐない。私は、兄さんに、日のみ子さまのありがたさを説いてゐるのだ。この國は、日のみ子さまのものだ。たとひ、兄さ

んが、きり開き、耕し植ゑたとしても、それはただ、日のみ子さまから、おあづかりしてゐるまでだ。」

「わからん。そんなむづかしいことはわからん。もつと、わかりやすいことをいへ。たとへば、なぜ、私が反抗しようとしてゐる日の軍におまへがつかへようとするのか——。それをいへ。兄をすてるわけをいへ。それを聞かう。」

弟磯城は、じつと考へました。たうてい、私の説明では、説明しきれない。あまりに高いもの、あまりにひろいもの、あまりにふかいもの、あまりに大きいものは、これを口でもつては、どうしても、説明しきれない。では、もつと小さなもの、兄がわかるやうなもので——と、弟磯城は、庭の木々を見つめながら、じつと考へました。

「兄さん。」

しづかに弟磯城は指さしました。

「あの庭の木をごらんなさい。あの木には葉が一枚もない。葉はみんなちつてしまつた。」

「さうだ。」

「葉は、たれに養はれてきたのだ。」

「親木にだ。」

「親木に……、さうでせう。養はれ養はれてきた、ふかい恩をすてて葉はなぜ、その親木をみすてて、ちつてしまつたのです。」

「冬がくるからだ。」

「冬がくれば、なほさら、葉でもつて、親木をかばつてやらねばなら

ない。それなのに葉はちつていく。親木は、はだかだ。」

「うるさい。つべこべ理窟をいふな。」

「理窟ではない、目のまへの話だ。」

「親木がかれるからだ。葉があれば。」

「なぜ……」

「冬は親木もねむる。葉まで養へない。それに、思ふぞんぶん日の光にあたりたい、寒いから。大方まあ、そんなことだらう。」

「そのとほりだ。兄さんは智慧者だ。」

「おだてるな、ばかめ！」

「おだててはゐない。それだけわかつてをればいいのだ。兄さんは、親木で、私は葉だ。私が兄さんをすてたとしても、それは、じゆうぶ

ん日の光にあたつてもらひたいといふ、私の愛情だ。すてることが愛だ。すてることが、兄さんを生かすための、ふかい私の眞心だ。兄さんが、矢でおひはらつた八咫烏さまを、私は、ごちそうをしてお迎へした。私は兄さんにも、日のみ子さまのおめぐみを知つてもらひたかつたから、わざとさうしたのだ。卑怯ではない。弟の眞心だ。今日わざわざ來たのも、人間の道を、ふみあやまらせたくないための眞心だ。」

弟磯城は、兄磯城のひざにすがりました。

「兄さん、わかつてもらへますか。兄さんがどこまでも反抗しようといふなら、私は、兄さんを救けるために、兄さんと戰ひますぞ、さあ、歸順して下さい。そして、同じ日の光にぬれて、幸福な生活をしよう兄さん！」

「いやだ。私はいやだ。私は、私の土地や人間をとられるのがいやだ。」

「どうしてもですか……。」

「おゝ、どうしてもだ。」

「仕方がない。あなたには、日のみ子さまのお心がわからない。日の神さまのおめぐみがわからない。」

「歸れ、兄をすてる者は卑怯だ。一族をすてる者は卑怯だ。」

「日の國の、ただお一人のみ子さまに刄向かふのは、もつと卑怯だぞ。」

「な、なんだ。この兄を卑怯といふのか。」

「ここまで話してもわからない。かなしいことだ。兄さんは目くらだ。兄さんはつんぼだ。」

「歸れ、歸れ、歸れ！」

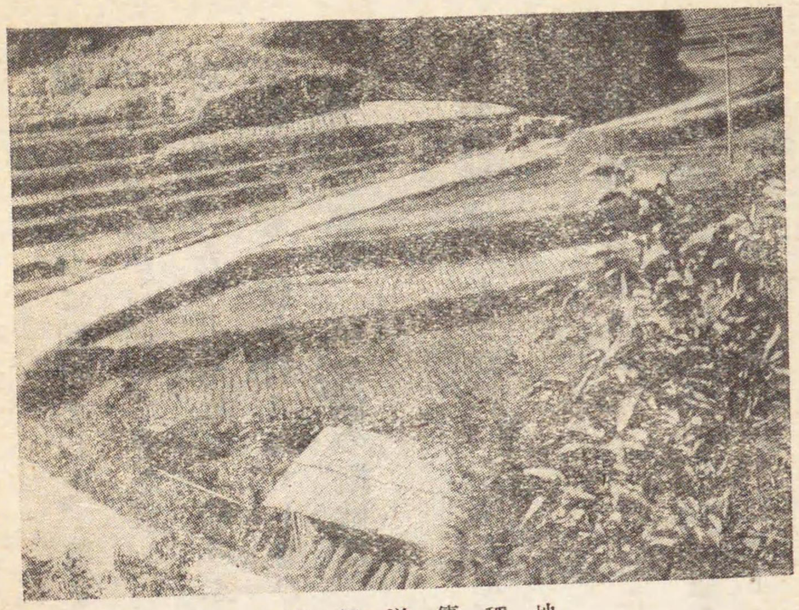
弟磯城は、力なく立ちあがりました。

目に一ぱい、なみだをためてゐました。

やがて滅亡していく一族の、たれもかれをも、さびしくながめました。

やがて、兄磯城追討の、みことのりが下りました。

盾並めて　伊那佐山の
木の間ゆも　い行きまもらひ
戰へば　吾はや飢ぬ
島つ鳥　鵜飼がとも



地稱傳道坂忍

今助けに來ね

盾をならべて、賊軍の射立てる矢を防ぎながら、伊那佐の山の木の間から、もの見を出して、はげしく戰ふ中に、あゝ、おなかがすいてつかれたよ。兵糧係の鵜飼部の人々よ、はやくわが軍をたすけに來い、といふ意味の御製です。これを軍歌として皇軍は、ひたおしに、どん〳〵

賊を打やぶつて進みました。勇ましく墨坂をこえて、敵のうしろにまはり、忍坂から進んできた軍と、はさみ撃にしました。奇襲にあつた賊兵は、一たまりもなく、斬りふせられ、兄磯城はもとより、兄倉下弟倉下らも、斬り殺されてしまひました。

磐余の地に、賊全滅の凱歌は、高くあがりました。

弟磯城は、しづかに、皇軍のあげる凱歌のどよめきを聞いてゐました。

私は卑怯だらうか。

私は卑怯だつたらうか。

いや！　さうではなかつたぞ！

弟磯城は、高く叫びました。

西には、もう夕焼けの色が、血のやうに流れてゐました。

十有一月癸亥朔己巳、皇師大に擧りて、將に磯城彦を攻めむとし、先づ使者を遣して兄磯城を徵さしむ。兄磯城命を承けず。更に、頭八咫烏を遣して召す。時に烏、其の營に到りて鳴きて曰く、天神の子、汝を召す。怡奘過怡奘過。兄磯城忿りて曰く、天壓神の至りますと聞きて、吾が慨憤みつつある時に、奈何にして烏鳥のかく惡しく鳴くやといひて、乃ち弓を彎きて射る。烏卽ち避去りぬ。次に弟磯城が宅に到りて鳴きて曰く、天神の子、汝を召す。怡奘過怡奘過。時に弟磯城慄然改容曰く、臣、天壓神至りますと聞りて、且夕に畏懼まる。善きかも烏。汝が鳴之若此者歟といひて、卽ち葉盤八枚を作して、食を盛りて饗ふ。因りて以て烏のまゝに詣到りて告して曰く、吾が兄兄磯城、天神の子來ますと聞りて、卽ち八十梟帥を聚め、兵

甲を具へて將與決戰。早に圖りたまへとまうす。天皇乃ち、諸將を會へて問ひて曰く、今兄磯城果して逆賊之意あり。召すにも來ず、之を爲むこと奈何。諸將の曰く、兄磯城は黠賊なり。宜べ先づ弟磯城を遣して曉喩さしめ、幷せて兄倉下、弟倉下を說さしめたまへ。如し遂に歸順はずば、然して後に兵を擧げて臨まむことも亦晚からじ。乃ち弟磯城をして利害を開示さしむ。而るに兄磯城等猶愚なる謀を守りて不肯承伏。

五倫の

冬ながら、日の光はうら〳〵と、葉一枚ない欅の梢から斜におちて、庭一ぱいに、青い光のしまをつくつてゐました。

長髄彦の本營では、つぎ〳〵に報告される負け戰に、氣をくさらせた人々が、暗い顏をしながら、むつつりと、だまつてすわつてゐます。

ここからは、山といはず、丘といはず、今日の日の戰のために、全力をあげて、はりめぐらし、築きあげた堅固な砦が、冬枯れの景色の中にすさまじく見えてゐました。

——負ける。きつと負ける。

今では、たれもの胸に、はつきりとそれがわかりました。

それは、砦の堅固さや、策戰のかけひきや、兵の數の多少などの問題ではなく、いはば、氣力の上の負け戰でした。

戰にとつて、一ばん大せつなこの氣力が、今では、ほとんど全軍になくなつてゐるのです。

戰の上手な長髄彦は、たれよりもはやく、このことに氣がついてゐました。

——いけない。足がういてゐる。おちつきをなくしてゐる。不安にかられてゐる。何か、大きな大きな力で、ぐつと全軍の氣持をひきしめねば、きつと負ける。

長髄彦は、不思議でならないのは、大きな戰があるごとに、皇軍のすべての心が、ます〳〵かたく結ばれていくことでした。

それが又、勝ち負けにかかはらないのです。勝てば勝つたで、かりに負けたとしても、又、その時に、全軍の心が、ぎり〳〵と結ばれていくのです。

「これは不思議だ。戰ごとに、ます〳〵心が一つになる。苦しみが加はれば加はるほど、心がかたく結ばれる。戰ごとに、心がばら〳〵になる自分の軍と、一たいどこがちがつてゐるのだらうか。」

長髓彥は、腕ぐみしたまま、じつと考へにふけりました。

喊の聲が、山にこだまして聞えました。

必死の聲でした。

冬木立の間をぬつて、かけめぐる兵どもの、劍と鉾が、陽の光にきらめいてゐました。

息づまるやうな戰です。

一歩も動けなくなつた、力と力が、今、同じつりあひをたもつて、がつしりと、かみつきあつてゐるのです。

だが、いづれか一方、かみつかれ、たふされねばならぬ戰です。その勝負が、もうはつきりと見えてゐました。

氣力の差です。

同じやうに見えてゐる力と力のあひだにも、ぢり〳〵おされていく弱さが、その呼吸でわかりました。

賊は、すでに息がみだれてきたのです。

「たしかに勝つてゐた戰だつた。それが、あの金鵄があらはれてから

目に見えて負けてきたのだ。金鵄――金鵄。なぜあの時、とつぜん金鵄があらはれたのだらう。目もあけられないほどのはげしい光だつた。いや、それよりも、金鵄のあらはれたために、私は、はじめて、日のみ子ををがんだ。尊い。まことに尊いお方だつた。おからだから、光があふれてゐた。金鵄よりもはげしい光だつた。私は、その時から負けたのだ。おそれといふことを知らなかつた私が、その時から、ぞつと、水でもかけられたやうに、心がふるへるのを知つた。――さうだ。それだ。光だ。氣力がたりなくなつたのは、光の結果だ。だが、おそれてはならないぞ。私の方にも、天つ神のみ子がおいでになる。み子にお二方はないはずだ。私の方が正しい。金鵄は間違つて、向かふへ行つたのだ。私の方へ來るべき金鵄が。――今にわかる。はつきり

邑鵄蹟聖皇天武神

と。わかりさへすれば、氣力で勝てる。み子の軍だといふことが、全軍にわかりさへすれば。」

長髓彦は、立ちあがつて、戰況を視察するために、門を出ました。

「おゝ、歸つてきたぞ。使が――。」

のびあがつて、長髓彦は、大聲で叫びました。

「ここだ、ここだ、ここだ！」
待ちこがれてゐることが、その兩手でよくわかりました。
さしまねく手の方へ、使は息せききつて歸つて來ました。
「どうだつた、天つ神のみ子はどちらだ。」
「はい、それが……。」
「先方か、こちらか……。」
「はい……。」
「はやくいへ、はやく。それだけ聞けばいいのだ。」
「はい、それが、どちらもです。」
「なに、どちらも……。お二方ともか……。」
「はい。」

「そ、そんなはずはない。お二方ともなんて、そんなことがあるものか。見せたのか！　證據の品々を！」
「お見せしました。天羽羽矢も歩靱も。」
「そして、はつきりいつたか、神の子であるわけを。」
「まうしました。この地に天つ神のみ子である櫛玉饒速日命が、天磐船に乘つて天降られました。そして我が妹の三炊屋媛をめとり、可美眞手命といふみ子まであげさせられました。およそ、天つ神のみ子におん二通りもあらうはずがありません――と。」
「うん、私のまうしたとほりにだな。」
「はい、一言も間違ひなく。」
「すると……。」

「すると、先方はまうしました。天つ神のみ子の本すぢは一つである
が、そのほかにも傍系の神は澤山にある。今汝が君としてゐるお方も、
天つ神のみ子には相違ないが、日のみ子さまこそは、本すぢのお方だ
……と。」
「私の方も、天つ神のみ子だな。」
「はい、だが……。」
「いや、いい。それだけ聞けばいいのだ。で、向かふの方にも證據が
あるはずだ。もう一度いつてこい。そして品物をおあづかりして來る
のだ。」
「はい……。しかし……。」
「行け！」

長髓彦は、おそろしいほど大きな聲を出しました。使は又、丘をく
だつて走りさりました。
「知らなかつた。大へんなことになつた。もし、證據の品でもあると
そして本すぢのお方だとすると……。とんでもない戰をはじめたこと
になる。だが、よもやあるまい。證據の品などあるはずがない。もし
なかつたら、勝だ。氣力をもりかへして、勝戰にすることが出來る。」
使は、すぐ歸つてまゐりました。
「ございました。」
それだけいふと使は、ぺつたりと、そこにうづくまつてしまつてし
まひました。息がきれたのです。

「なに……。」

長髄彦は、かけよりました。

「おゝ、天羽羽矢と歩靫だ。まぶしいほど立派な。くらべものにならぬほど尊いみ證據だ。」

長髄彦は、そこにすわつたまま、いつまでも、いつまでも、それをながめてゐました。

「金鵄がお弓にとまつたはずだ。金鵄こそは天つ神だ。天つ神のおたすけがあつたのだ、向かふに。このごもおたすけがある……。戰ひは向かふに負ける。だが軍備をととのへ、ここまで戰をして、今さら、配下のてまへ、中途でやめるわけにはいかぬ。やめれば負けだ。負ければ長髄彦はきえてしまふ。さうだ、だまつて、このまま最後まで戰

ふことにしよう。戰つてさへをれば、私は頭でゐることが出來る。」

長髄彦は、みしるしを使にもたせて、皇軍へおかへしすると、その足で、すぐ丘をかけおりました。

「戰へ！　力のかぎり。負けてはならぬ。戰へ！　戰へ！　戰へ！」

氣がくるつたやうに、長髄彦は走りつづけました。

饒速日命が、長髄彦をお斬り殺しなさいましたのは、その日のことです。

長髄彦は苦しい息の下から、最後まで叫びとほしました。

「戰へ！　戰へ！　戰へ！　長髄彦のために。あゝ、金鵄をおそれるな。勝つのだ。長髄彦のために。」